

日本古代における族民の性質とその起源

前之園 亮 一

目次

はじめに

問題の設定

第一章 血縁的同族か擬制的同族かの問題

第二章 擬制的同族としての内容

(一) 政治的同族結合の要素

(二) 軍事的同族結合の要素

(三) 祭祀的同族結合の要素

第三章 族民の起源

(一) 族民の起源

(二) 族民の分布と族民発生の特長

第四章 族民付与の起源

むすび

はじめに

古代氏族の構造や機能を解明する手懸りの一つとして、族民については、直木孝次郎氏、井上光貞氏、平野邦雄

氏、佐伯有清氏を始め、諸家が高説を発表され、幾多の成果が積上げられている。⁽¹⁾私も以前に、諸大家の末尾に付して、幼稚ながら卑見を述べさせていだいたことがあった。⁽²⁾

その後しばらくして、石母田正氏の『日本の古代国家』が刊行され、その中で氏は、「多少唐突にきこえるかもしれないが」と前置きされながらも、『私は、(一)ヤカラ・ヒトは、「部」と同じく身分標識としての一種であり、(二)それはおそらく庚午年籍によって無姓の百姓に附せられたものであり、(三)その実体としての身分的統属関係、すなわちヤカラという同族または同族的擬制をともなつた従属関係自体は、庚午年籍以前または大化前代の首長制の内部に発生したものとみるのである。いいかえれば、ヤカラ・ヒトなどの身分関係は、民戸内部における前記の階層分化の結果発生した従属関係であり、それにたいする首長支配の対応の一形態であり、在地における首長を頂点とする新しい階層秩序の形成とかがえるのである。本来首長身分に限定されていた古墳の築造が、群集墳という形で一般民戸にまで拡大されるさいにも、それはヤカラ・ヒト的な身分関係、いいかえれば首長となんらかの因縁によって結合された村首的階層またはその集落に限定されたものではあるまいか。⁽³⁾』という新しい族民論を展開されているが、この石母田氏の新説は、族民の本質を要約的にもっともよく突いたものと私には思われる。

そこで、氏の新説にヒントを得てというより、そっくりそのままを私なりにもっと詳述したのが、この拙稿である。従って、その内容は「多少唐突」で、破天荒な族民論であり、随處でまた結論的にも諸家の高説を無下に否定するような結果になってしまった。しかしながら、結果的にそうなたままであつて、浅学非才として、先学の貴重な成果に対して、徹頭徹尾真正面から学び、精一杯取組んだつもりであるが、何分、初学者の蛮勇とか盲蛇ものに怖じずやらで、高説を曲解あるいは理解不足のまま、暴論に流れているかもしれない。それで、万一、非礼を犯しているような点があれば、予め深謝してくれぐれも御寛恕を乞い願う次第である。

問題の設定

旧稿で大宝二年の「美濃国戸籍」を中心史料として論じたことは、(一)婚姻の考察より、村落における族姓者の身分が、部姓者・人姓者・無カバネ姓者よりも高く、カバネ姓者につぐ地位にあったこと⁽¹⁾。(二)各戸の貧富の差を等級化した九等戸に注目した場合、下下戸が多い中に族姓戸はカバネ姓戸について下上・下中戸が多く、部姓・人姓・無カバネ姓戸より村落内における経済的地位が一般的に高いこと⁽²⁾。(三)族姓者といえども、中には中央の下級官人として出仕して、「族姓」(考・賞)↓官位・カバネ姓」というコースを歩いてカバネ姓に昇格した者もあり、帶位帯官のカバネ姓者の中には、かつて族姓者であった者が少なからずいる可能性があること。(四)美濃国戸籍の班田農民の有位者八名のうち、六名を族姓者で占めているのは、かつて族姓者が豪族軍の下士官的役割をになう精兵として、族長たる国造や県主と共に壬申の乱に従軍したが故の授位であり、国造族・県主族は、大化以前の国造・県主の軍事的同族組織の一面を有していた可能性があること。(五)族姓付与の起源は、壬申の乱に吉野方として従軍した中小豪族の同族に対する行賞として授与されたのをきっかけに、その後の造籍の過程で、全国のいまだ無姓の農民や帰化人に対しても一斉付与が行なわれていったこと。(六)ただし、族姓付与の対象となった無姓の農民とは、諸豪族のあらわな分割支配や争奪的になるような人々ではなく、豪族団の構成員としての有力農民で、かつカバネ姓者の同族である無姓の人々のことである。

略々、叙上のようなことを論じたのであったが、それは八世紀初頭の美濃の族民の場合に限られており、族民全般にわたる考察ではなかったので、時間的・地域的にも考察の範囲を拡げながら、旧稿より一步踏込んで、(A)族民

は豪族の同族であるといっても、血縁的なそれか、あるいは全く擬制的同族であるのか。(B)万一、非血縁の擬制的同族であるとすれば、他にいかなる因縁・原理において同族の結合を形成しているのか。(C)そして、その擬制的同族結合の形成は、いついかなる理由によって発生したのか。この三つの問題を設定して、以下に順次論述してみようと思う。

なお、もう一度族民論の出発点に立返って、新規に出直したい気持ちから、以下の論の進め方は、多く直木氏説に沿いつつ、あわせてその検討をしていくことにする。

（その前に、用語の整理をしておきたい。「ウジ+カバネ」をカバネ姓、「ウジ+カバネ+族」を族姓、「ウジ+人」を人姓、「ウジ+部」を部姓、ウジのみでカバネのないものを無カバネ姓、ウジもカバネも持たないものを無姓と呼ぶことにする。族民とは、「ウジ+カバネ+族」という形で呼称・表記されているようになった時代、いまだそうではない時代のいかんを問わず、今日では明らかでないが、かつて存在したはずの「族」の全性質・実態及びそれを体現した人々・集団を指すものとする。）

第一章 血縁的同族か擬制的同族かの問題

ここでは、族民がウジ・カバネを同じくするカバネ姓者の血縁的同族なのか、擬制的同族なのかという問題に答える手懸りとして、両者の通婚の粗密の度合を調査してみることとする（第一表「族民とカバネ姓者の通婚」）。

地 域	第一表 族 民 と カ バ ネ 姓 者 の 通 婚	
	族 民 の 氏 姓	カバネ姓者との通婚件数
	(A) ウジ・カバネを同じくする	(B) 族民の全通婚件数
	(A) (B)	(A) (B)
	ウジ・カバネを同じくするカバネ姓者との通婚率	$\frac{(A)}{(B)} \times 100$ %

日本古代における族民の性質とその起源（前之圖）

美濃							近江	山背								右京	
※3								※2				※1					
牟下都君族	敢臣族岸臣	五百木部君族	阿蘇君族	不破勝族	県主族	国造族	大友但波史族	石作連族	栗田直族	布世君族	出雲臣族	白髪部造族	上毛野君族	出雲臣族	木勝族	栗田臣族	太臣族
0	0	1	0	0	4	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0
2	2	2	1	8	52	35	7	1	1	1	2	1	2	2	1	1	1
$\frac{0}{2}$	$\frac{0}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{0}{1}$	$\frac{0}{8}$	$\frac{4}{52}$	$\frac{0}{35}$	$\frac{0}{7}$	$\frac{0}{1}$	$\frac{0}{1}$	$\frac{0}{1}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{0}{1}$	$\frac{0}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{0}{1}$	$\frac{0}{1}$	$\frac{0}{1}$
0	0	50	0	0	7・69	0	0	0	0	0	50	0	0	50	0	0	0

豊 後	越 前					
		茨 田 連 族	江 沼 臣 族	土 巻 臣 族	神 直 族	勝 族
0	2	0	0	0	0	0
1	17	1	3	1	3	3
$\frac{0}{1}$	$\frac{2}{17}$	$\frac{0}{1}$	$\frac{0}{3}$	$\frac{0}{1}$	$\frac{0}{3}$	$\frac{0}{3}$
0	11・70	0	0	0	0	0

※1神龜三年山背國愛宕郡出雲郷雲上里・雲下里計帳と※2天平五年山背國愛宕郡計帳の出雲臣族の婚姻は、別々に集計した。※3県主族の(A)の通婚件数四件は、県主との通婚一件のほかに、県造との通婚三件を含む。それぞれの族民の史料、出典は直木氏の「第一表 族民年代順一覧表」（『日本古代国家の構造』、第一部、二 日本古代における族について―族民の研究―）に明らかなので、省略した。

第一表より、全国的に族民とウジ・カバネを同じくするカバネ姓者との通婚件数が少なく、通婚率もきわめて低いことが知られる。全通婚件数が比較的によく判明できる族民の場合でも、美濃の国造族は三十五件の通婚例が知られながら、国造との通婚は一件もなく、県主族も五十二件の全通婚件数のうち、県主・県造との婚姻は僅かに四件にすぎない。また、不破勝族は八件の通婚件数のうち、不破勝との例は一件も見えない。越前の江沼臣族の場合も、十七件中二件と江沼臣との婚姻は少ないのである。ただし、山背の出雲臣族と出雲臣、美濃の五百木部君族と五百木部君の通婚率が五十パーセントの高率を示しているが、これは全通婚件数が二件ずつしか判明できず、万一、国造族や県主族のように全通婚件数が豊富に知られたとすれば、その通婚率ももっと落込むはずであろう。

以上、現存史料にみる限り、族民とウジ・カバネを同じくするカバネ姓者との通婚は、緊密であるというより非常に粗であって、両者が一定の親等内の血縁者あるいは姻族であったとは、とうてい考えられないのである。しか

るに、些か極端に過ぎるかもしれないが、元来、族民はカバネ姓者の血縁者ではなくして、ほとんど擬制的同族であるという前提をたてておいて、以下の論を進めていこうと思う。

かように幾分か割切った考え方を敢行する理由の一つは、「血縁者」あるいは「親族」・「同族」という言葉の意味内容が、人それぞれに違い、微妙な食違いや誤解が起りやすく、現に直木・井上両氏の論争にも少なからず擦違いを生じている。

それでは、族民を「有姓者の親族または同族」という微妙な表現を取らず、思切って一旦「擬制的同族」という表現で限定しておき、次章でその「擬制的同族」としての内容を逐次明らかにしていこうと思う。

第二章 擬制的同族としての内容

第一章において、族民がウジ・カバネを同じくするカバネ姓の同族であるといっても、それは血縁的要素によって結合された同族ではなく、きわめて擬制的なものであるらしいことを述べたのであるが、それなら両者の間には、ほかにいかなる同族結合の要素・紐帯が介在しているのか、これを明らかにしなければならない。先に結論めいたことを言ってしまうと、族民とウジ・カバネを同じくするカバネ姓者は、政治的・軍事的・祭祀的要素によって結合された同族であると思われるが、まず政治的要素から論じてみたい。

（一）政治的同族結合の要素

すでに直木氏は、「第三表 カバネ別族民姓一覧表」を作製され、族字がすべて真人・朝臣・宿禰を除くカバネ

第二表 族字のつくカバネ

計	村落首長の 族のカバネ				豪族級の カバネ							カバネ十族 氏の数
	史 十 族	寸 主 十 族	勝 十 族	阿 比 古 十 族	県 主 十 族	国 造 十 族	造 十 族	直 十 族	君 十 族	連 [※] 十 族	臣 ^{天武八姓} 十 族	
種類												
58	4	1	4	1	2	3	2	6	10	7	17	1
58	10				48					25		計

※阿刀連族を加えた。（『大日本古文書・十二』二七一、三四六頁。）

- 3、林臣—臣族—部
- 4、若倭部臣—部連—部臣族—部
- 5、若桜部臣—部臣族—部

の下に付されていることを指摘されたのであるが、改めて族字がどのようなカバネに付せられているかを簡単に示すと、第二表のようになる。

これを見るに、直木氏が「族民を有する豪族の特徴としては、第一に地方在住の中・小豪族、特に国造級のものが多^①い」と言われたのは誠に至当であることがわかる。ただ、それに関連して注目されるのは、村落首長級のカバネに族字が付されている例が非常に少ないことである。特に、カバネ首は史料上にいくらでも散見するのに、首十族は一件も見いだせない^②。このようなことは、出雲において典型的にみられることである。

それは、『出雲国風土記』（以下『風土記』）、「天平六年出雲国計会帳」（以下「計会帳」）、「天平十一年出雲国大税賑給歴名帳」（以下「歴名帳」）等から知られる出雲の氏族構造が、ほとんど共通して（部）臣—（部）首—部という均一的な在方をしているのが指摘されており、その中で族民を有する氏族の構造を列挙すると次のようである。

- 1、語部君—部首—部君族—部
- 2、神門臣—（首）—臣族—神門—部

6、倭文部臣—部首—部臣族—部

7、漆部直—部直族—部

8、？ —生部臣族—部

9、？ —阿比古族

これより、出雲になぜ首族が存在しないかがわかる。すなわち、典型的には語部君族・神門臣族・若倭部臣族・倭文部臣族にみられるごとく、族字が氏族のもっとも高いカバネに付せられているからである。⁽⁴⁾ また、出雲の有力な豪族は出雲臣・神門臣を始め、『風土記』に記された郡司三十四人の氏姓をみても、某臣・某部臣を称する者が二十九人を占めており、出雲では臣がもっとも高いカバネであったことが知られ、それと出雲の族民が多く某臣族・某部臣族を称していることは注目に価する。

そしてこの事實は、族民が氏族中でもっとも有力なカバネ（天武八姓以前のカバネを指す。これを旧カバネと呼ぶことにする。）を有する者、つまり族長のためにつくりだされた同族組織ではなからうかという推測をおこさせる。なぜなら、族民が単にカバネ姓者の同族であるのなら、神門臣族とせずに神門首族という姓で戸籍に登録すれば十分であるのに、実はそうでないからである。

大体、右のような見当をつけて族民を有する氏族の構造を広く検討してみると、次のような構造が知られる。⁽⁵⁾

1、阿刀連—造—連族—阿刀—部

2、茨田連—勝—連族—茨田

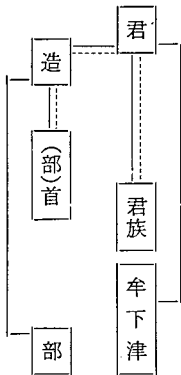
3、掃守連—造—首—連族—部

4、出雲臣—積首—積—臣族—出雲—部

- 5、江沼臣―首―臣族
- 6、身毛君―造―^{（首）}部首―君族―牟下都―部
- 7、物部連―部首―部連族―部
- 8、県主―県造―県主族―県主人

（これらは、居住地域が互いに近接し、同一系統のウジに属すると思われる場合を選択したもので、例えば、中央の物部連と武蔵の物部直のように厳密な物部連直という同族関係があったのか疑わしいものや、山背という同一地域に共存していても、粟田臣と粟田直が粟田臣―直という具合に、必ずしも同一のウジであると断定できない場合は除外したものである。）

右の例をみても、出雲におけると同様、族字が氏族のもっとも有力な旧カバネの下に付加されている傾向が窮える。中でも典型的なのは、美濃の国造氏族身毛氏の場合で、―図式化すると身毛氏は次のような構造をとっていたと考えられるのであるが（第一図）―族民がカバネ姓者の同族であるにすぎないのなら、牟下都首族とされてもよいかに思われるのに、身毛氏で最高の有力者たる身毛君（牟義国造）のカバ



（―は支配・隷属、――は同族意識。

なお、右図は野村忠夫氏著『律令官人制の研究』八六頁の図を参照して作製した。）

ネの下に族字が付加されているのは、見落せない点である。思うに、族民というのは、首長制や族長権の発展・強化という政治的目的のため、ある時期に族長の下に新たに組織・編制された擬制的同族なのではあるまいか。

先歩りするようであるけれど、第三章に後述のとうり族民の起源は、六世紀を中心に全国的規模で爆発的に発生した群小古墳を営んだ新興の有力家父長家族が、豪族、特に族長の同族組織に編制されたものと考えているのだが、それなら豪族という支配者集団の内部に族長または氏上なるもの

が、固定・定着し始めたのはいつごろのことであろうか。

『日本書記』（以下『紀』）を見ると、天智紀三年二月丁亥条の「其大氏之氏上賜大刀」。小氏之氏上賜小刀。其伴造等之氏上賜千楯・弓矢。」という記事が氏上の初見であって、この頃には制度的にも氏上が成立していたことが窺えるけれど、それ以前はどうであったの明らかでない。

しかし、顕宗紀元年の置目をめぐる話に狹狹城山君倭倭宿禰と韓倭宿禰が登場し、後者はかつて（雄略即位前紀）、天皇の父市辺押磐皇子を殺したことが露顕したため、死罪になるところを陵戸にされたが、前者は姉置目の功によって本姓の狹狹城山君の氏姓を賜わったとある。推察するに、この話は山部としての伝承のほかに、族長権をめぐる狹狹城山氏の内訌の伝承要素を含んでいるようで、倭倭宿禰が「賜本姓狹狹城山君氏」わったのは、新族長の地位を公認されたことを意味するのかもしれない。また、大化以前の称号宿禰が前川明久氏の言われるごとく族長に対する称号であったとすれば、狹狹城山氏に同時に二人の宿禰がいたというのもおかしいわけで、置目をめぐる話は、元来、狹狹城山氏における族長権争いに出たものと考えるのである。

さらに明確なのは、安閑紀の武蔵国造氏の内紛である。その結果、国造権は北武蔵の笠原直使主が得たのであるが、それ以後は永く使主の系統に国造権が世襲されたらしい。というのは、前期古墳文化の中心が南武蔵にあったのに対して、後期古墳文化時代になると古墳文化の中心が北武蔵に移動し、しかも埼玉県行田市の埼玉古墳群にみられるように首長権の所在が固定化しているからである。

右のように、族長権が氏族のある系統に世襲化・固定化していく傾向は、狹狹城山氏・武蔵国造氏のみならず、五世紀末から六世紀にかけて全国的に展開された現象だったのであるまいか。それについて参考となるのは、族民を有する出雲の神門氏の動きである。

それは、出雲の古墳文化によって知られることだが、五世紀以前の前期古墳文化の伝統をもたない出雲西部の簸川流域に六世紀半ば以降突如として大型古墳が出現し、神門郡を中心として出雲西部における後期古墳文化の中心をなすに至る⁽⁸⁾。この現象を山本清氏は、簸川平野の開発の結果、在地の勢力が急激に成長したからであろうと推測されているが、該地域で最大の豪族といえは神門臣である。

この神門氏が急激に大をなすに至った原因は、前述の簸川平野開発とならんで、内部的には首長制の進展があったからであろう。つまり、等しく神門臣を称するといっても、その中で他を抜きんできた家や系統が発生・定着し、その首長を頂点とした氏族内の体制が強化されたからと考えられる。それに、神門氏の族民が神門首族とならなかった理由は、神門氏が臣―首―臣族―神門―部という氏族構造をとる中で、族長神門臣の首長制の発展を支える擬制的同族であったからであろう。

同じく出雲の語部君―部首―部君。族―部、若倭部臣―部連―部臣。族―部、倭文部臣―部首―部臣。族―部という氏族構造をみても、氏族でもっとも有力なカバネの下に族字が付されていて、首長と族民の関係を推測できる。

従って、私は狭狭城山氏・武蔵国造氏の族長権をめぐる内訌の背景を、五世紀末から六世紀にかけての豪族内部に発生した首長制の発展という広汎な現象とみなし、族民とは、そのような時になって首長制とその発展を支える重要な勢力として、豪族配下の群小共同体の内部に成長し始めた有力家父長家族を首長の下に編制した擬制的同族であると思う。

かような意味において、ウジ・カバネを同じくするカバネ姓者と族民は、政治的要素によって結合された同族であると考える次第である。

(二) 軍事的同族結合の要素

族民が豪族の軍事的同族であったことを推測できる史料は、美濃国戸籍しかみあたらない。従って、この部分の記述は多く旧稿と重複するが、論じ残した点や付加したいこともあるので、煩を厭わず論述してみたい。

大宝二年の美濃国戸籍から八名の班田農民有位者の氏姓を検出できる。（第三表「美濃国戸籍の有位者」。本表は、野

第三表 美濃国戸籍の有位者						
里	位階	有位者	戸主との 関係	年 齢	乱当時	
春部	務従七上	国造族甥	戸主	77	47	
春部	務従七下	国造族雲方	戸主伯	57	27	
春部	務従七下	国造族馬手	戸主	69	39	
半布	務従七下	国主族都野	戸主	59	29	
半布	務従七下	不破勝族吉麻呂	戸主	58	28	
半布	追正八上	国主族津麻利	戸主	60	30	
三井田	追正八上	五百木部君木枝	戸主	61	31	
三井田	追正八上	五百木部東人	戸主弟	55	25	
三井田	氏姓不明の有位者が他に6名いる。					

村忠夫氏の「第二表 御野国戸籍の有位者」、前掲書六六頁を参照して作製した。これを野村氏は「壬申の乱の勲功による授位である」とされ、従うべき見解であると思う。そしてよく注意して表を見ると、有位者八人のうち六人を族民で占め圧倒的に多い。これを単に彼らが勇敢で軍功を挙げたためだというだけでは説明にならない。

なぜなら、額面どうり受取れないにしても『壬申紀』には多数の人民が動員されているのを見れば、もっと多くの部姓・人姓者も叙位にあずかってしかるべきであるのに、部姓の有位者は五百木部東人しかみあたらないからである。それで別に理由を求めるなら、族民は豪族の同族として、旧族長の統制下にカバネ姓者（族長の血縁者）と共に、旧隷属民（部姓・人姓者）をも徴発し、強固な同族意識で結ばれた豪族軍の下士官的役割をになう精兵として壬申の乱に従軍し、その行賞として乱後叙位されたのであらう。

即ち、伝統的に族民が豪族の軍事的同族であったが故に、部姓・人姓者より優遇されあるいは族長を通じて行賞を要求できる有利な立場にあったからと思われるが、少なくとも、美濃国戸籍の六人の族民有位者の存在から、大化以前における豪族と族民の軍事的なかわりを推定することができであろう。思うに、族民は豪族の恒常的軍勢力として、豪族軍の中核的精兵を形成していたのであり、いわゆる門号氏族と呼ばれる軍事的氏族ばかりでなく、多くの中小豪族も彼らなりの恒常的軍事組織を有していたことを知りうるのではあるまいか。

そこで、族民を有する軍事的氏族を搜すと、物部連・的臣・五百木部君があり、上毛野君や豊後の海部君は外征に参加したものであろう。また神門臣は、『風土記』の出雲郡健部郷の条に神門臣古禰を健部に定めたと言い、神門郡条には神門臣伊加曾根が神門を買ったという記事があるのを見ると、門部的な性格を有していたようである。⁽¹¹⁾こうした氏族が族民を有しているのは、族民が豪族の恒常的軍勢力の一斑をになっていた可能性を強めるものである。

なお、そのほかに国造軍というものがある。岸俊男氏は、「国造の制度上の改変にもかかわらず、防人集団の国造丁には大化前代の旧い国造軍の形態がなお継承されて遺存している」⁽¹²⁾と、国造軍の存在を明らかにされた。氏によると、防人の編制から推測しうる国造軍は「国造丁（国造）―助丁―主帳丁（帳丁・主帳）―（火長）―上丁（防人）」⁽¹³⁾という編制・序列をとっていたらしい。

そこで、この国造軍と族民について石母田氏が、『その（国造軍のこと）中核が国造とその統属下の首長の一族あるいは後に「国造族」・「国造人」となるような勢力であったとみられるが、しかし国造軍が海外出兵にもたえ得る軍隊であるためには、一般民戸からも「軍丁」を徴発しなければならなかったのは当然であろう。⁽¹⁴⁾』という注目すべき見解を提示されている。私は氏の意見を支持したいと思う。なぜなら、国造軍が右の如きなんらかの編

制・序列を有する軍隊である限り、出動命令に対して俄に寄せ集めた軍隊というより、なにかしら恒常的軍事集団を中心にして、他の多数の一般人民を徴発した制度的なものであったように思われるからである。

しかるに、族民は豪族の恒常的軍事力をになうものとして、国造の出兵の際には、国造軍の中心的兵力となつたのではあるまいか。無用の推測かもしれないが、六世紀を中心に全国的規模で爆発的に発生した群集墳には、鉄製農具とくにわずかながらも武器が副葬されている。この群小古墳を営んだ有力家父長家族は、激しい階層分化の中から共同体の上層におどりでた有力農民であるだけでなく、日常的武力を保有する武装家族であつたに違いない。国造など群小の豪族は新興の彼らの実力を無視することができず、彼らを族民という擬制的同族組織に編制していったのではあるまいか。

このような時に国造が外征出動の命を受けた場合、支配下の群小共同体に招集すべき兵士の員数をわりあて、小共同体の首長や有力家父長家族たる擬制的同族を部隊長にした小共同体ごとの部隊を編制させ、それらを結集して迅速に軍団編制ができるような仕組になっていたのではあるまいか。そうして結集された国造軍の将校には、馬に乗り鉄製の甲冑や武器で身を固めた国造の親族（国造の血縁者や小共同体の首長的カバネ姓者）を配し、最高指揮者に黄金の馬具で飾りたてた馬に乗り、金色に輝く甲冑と太刀で身を飾った国造自身がつたのであらう。有力家父長家族たる族民は、主帳丁や火長にあたるような国造軍の下士官的役割をになう精兵を形成したのかもしれない。群集墳から馬具はめつたに出土しないので、彼らはおそらく歩兵下士官であつたらう。美濃国戸籍に壬申の乱従軍によると思われる八名の農民有位者のうち、六名を国造族・県主族など族民で占めているのは、彼らが単なる一般兵士でなかったことを物語ると同時に、豪族の軍事的同族であつたことを教えてくれよう。

要するに、族民は国造など豪族の富国強兵策のために、村落の新興の上層農民集団が、政治的・軍事的同族組織

として編制組織されたものであって、そうすることによって豪族は一層君主化し、かような地域ごとの首長制の発展を基盤として、初めて朝廷による国造制の施行も可能となったものと考ええる。

（三）祭祀的同族結合の要素

叙上のように、族民がウジ・カバネを同じくするカバネ姓者と政治的・軍事的同族結合の要素を保有するのであれば、祭祀的同族関係もあったのでは、そういう予想が当然起るであろう。八世紀の史料にもとづいた場合、それらしきものを検出することができる。私がまとめた限りでは、次のとおりである。

- (1) 石上神社と物部連——物部連族
- (2) 鴨下上社と鴨郡主——鴨郡主族
- (3) 美濃国加茂郡郡主神社と郡主——郡主族
- (4) 熱田神社と尾張連——尾張連族（尾張国造族）
- (5) 熊野神社と出雲臣——出雲臣族
- (6) 宗形三社と宗形君——宗方君族
- (7) 阿蘇神社と阿蘇君——阿蘇君族

細かにいえば問題があるとしても、およそ旧社と言われる神社とかわわりをもち、宗教的性格の濃い氏族が、族民を有しているのは看過できない。こうした点に注意した意見として、直木氏は、「宗方君は胸形大神を祖神としていただく古代著名の名族で、宗教的色彩の強い点で特色を持つ。先進的な筑紫に居りながら後まで古い族民組織の形態を残していることも当然であろう。出雲臣がやはり族民を有していることが考え併⁽¹⁵⁾される。」と指摘さ

れている。また美濃国加毛郡半布里戸籍の県主族について、『事実このアガタヌシ族の一種であり、その祭祀が県主神社と関係深かったであろうことは、この地が加茂郡であり、かつ延喜式加茂郡に県主神社があつて鴨県主神社とよばれたことなどよりも考察される。（中略）。国造族などの場合と同様に、その族的結合が奈良時代の呼称の上に「族」として残存している背後には、前代の祭祀的關係が一応は注意されねばなるまい。思うに御野の場合カモ「県主族」とみえており、天平五年の山背国愛宕郡計帳に、「鴨県主族」と記されているのも、県主神社をめぐるアガタヌシ族の關係を推測せしめるものがある。』⁽¹⁶⁾とは、上田正昭氏の見解である。八世紀の史料にみる限り、祭祀を結合要素とする同族關係も可能となつてきはしないだろうか。

ところが、津田左右吉氏は、「余は、氏神の祭祀による同族の団結が上代に存在した、という通説に従いかねるのである。」⁽¹⁷⁾と、祭祀的同族結合を否定されている。しかしながら、直木氏は津田氏の意見に疑問があるとして、「それ（氏神のこと）が必要であつたことは、神の祭祀を同じくする同族団結があつたことを物語る。神の祭祀が団結の基礎ではなくても、少なくとも同族団の祭神があつたことを示している。そのような神は氏に特有な神であつたはずで、単なる地方民衆の神とは別であろう。祖先神についての津田の説には賛成するが、氏神否定論には賛成できない。」⁽¹⁸⁾と反論されている。

それに仏教信仰においてすら、古くは額安寺と額田部氏・当麻寺と若麻績氏・法興寺と蘇我氏など、寺院も氏寺として営まれているのであれば、原田敏明氏が「古来の宗教信仰がその当時の氏族制社会において、民族的なものであつたことはいうまでもない。寺院が氏寺の形で建立される以前に、すでに早くから、神は氏の神であつて、それを祭る社は氏の社であつたのである。」⁽¹⁹⁾と言われる如く、いまだ祖先神ではないが、なんらかの自然神を氏神として、氏族の守護神の意味で祭っている段階においても、族民と豪族の祭祀上の同族關係を考へることが可能なので

はあるまいか。

族民を有する物部・尾張氏が太刀神を、鴨島主が雷神・水神を、宗形氏が海神を、阿蘇氏が阿蘇の山神を氏族単位で祭っていなかったといえようか。これらの諸氏に宗教的性格が強くなったのは、大化以後ではなくそれ以前からと考えて間違いないだろう。

とにかく、諸豪族は血縁的つながりをもつ祖先神としての氏神ではないが、独自の守護神的な氏神と氏神神社を古くから祭っていたことが想像でき、その氏神の祭祀は、族長が司祭となり親族（族長の血縁者Ⅱカバネ姓者）が参加したのであろうし、一般民衆の祭祀とは違った豪族の特権であつたろう。またその祭祀が、同族団結の基礎ではなかったにしても、要素の一つになっていたと考える。

成長しつづつあった有力家父長家族が、六世紀を通じて豪族の政治的・軍事的同族組織に編制されていくと、豪族の行なう氏神祭祀に関与できる特権が族民にも認められ、族長を頂点とし彼らを底辺とする豪族団の氏神祭祀上の同族結合が形成されていったものと思う。独自の強固な権力体系をもたない群小の豪族が、六世紀という古代の転換期を生き抜いていくためには、成長する人民の力、即ち有力家父長家族層の経済力・武力を、あらゆる手段を駆使して機会あるごとに味方を引入れておくことは、まさに時代の急務になっていたに違いない。更に族民の祭祀的同族化は、あたかも六世紀頃を中心とする朝廷の日の神イデオロギー支配策や、中央祭官制の成立等に照応するイデオロギー支配策の地方版として理解しえないであらうか。

第三章 族民の起源

第一、第二章において、族民とウジ・カバネを同じくするカバネ姓者との間に婚姻関係が僅かに認められるが、それよりも政治・軍事・祭祀の面において、両者は密接な同族関係を有していることを不十分ながら論証したものである。それなら、八世紀の史料を通して知られるこうした同族関係・結合は、いつ、いかなる理由で形成されたのか、次に考察すべき問題である。直木氏の言われるような豪族団の基礎組織として、はるかに遠き三・四世紀頃に形成されていたのか、それともずっと下って、井上・平野両氏の主張される律令制の発達しはじめる七世紀後半に一律に形成されたのであろうか。その孰れかであるとしても、あるいはその孰れでもなくとも、族民とカバネ姓者との右のような同族関係・結合は、決して一朝一夕に形成されたのではないことは予想できよう。

ところで、族民の起源を有力家父長家族と群集墳の発生という観点から説きおこしたものに、「はじめに」紹介した石母田氏の説がある。そこには、「本来首長身分に限定されていた古墳の築造が、群集墳という形で一般民戸にまで拡大されるさいにも、それはヤカラ・ヒト的身分関係、いいかえれば首長となんらかの因縁によって結合された村首的階層またはその集落に限定されたものではあるまいか。」⁽¹⁾と明確に提示されている。これは族民の起源に関する第三の立場であるが、私は妥当な考えであると思う。しかし、いまだ詳論されているわけではないので、以下にそれを試みてみたい。

(一) 族民の起源

考古学的知見を参照するとき、後期古墳時代の盛期、六世紀前半から後半にかけて、それまで古墳の発生をみなかった地域にも、広汎にしかも爆発的に発生した小墳墓群、すなわち群集墳発生の事実は、族民の起源・形成に関する重要な理解を教示してくれそうな気がする。とりあえず、群集墳の考古学的・歴史学的意味を概述してみようと思う。

和島誠一氏の「古墳文化の変質⁽²⁾」と題する論文によると、群集墳の成立する年代は地域によって違う。畿内では既に、五世紀末から六世紀初頭にかけて須恵器を伴う貧弱な小円墳が発生したが、爆発的に、また全国的に発生するのは、六世紀前半から後半にかけてである。前方後円墳が北九州から関東まで一つの定式をもって現われるのに対して、群集墳は地域ごとに不均等な発展を示している。

しかし一般に共通していることは、墳形がほとんどごく小規模な円墳であり、たまにその群の中に前方後円墳が存在する例がある。また副葬品は須恵器・土師器・鎌・刀子など日常生活品と鉄製の剣・鏃などが主で、希に甲冑・馬具が出土する場合もある。これは、被葬者間の激しい階層分化を示すものらしい。また、個人墓というより何回も追葬が行われる家族墓である点も主要な特性である。従って、横穴式である。

右のごとき特徴を有する群集墳は、どのような歴史状況と段階に照応して出現したのであろうか。和島氏は次のように説明されている。

「もはや支配者層だけでなく、村落共同体の内部にも、この程度の古墳を作る家父長家族の階層が分化してきたことを示すものであろう。このような群集墳の成立には複雑な歴史条件が内在したであろうが、五世紀以来の生産力の急激な発展が、その基底をなしたことは疑いない⁽³⁾」。つまり、五世紀を通じて遂行された半島経営によって、鉄製品を中心とする新しい生産用具、進んだ生産技術、また手工業部門を主とした組織形態及び技術者の大流入と

渡来は、生産力を飛躍的に増大させ、部民化されているといないにかかわらず、村落共同体内部の階層分化を大いに促進したのであらう。

このような広汎で深刻な社会的變動に対処するため、当然支配体制の再編制を迫られてくる。従来、群小共同体の上に、その共同体的關係を基盤として支配者が君臨するという、いわゆるアジア的な構造をとっていたのであったが、「五世紀末から六世紀に入ると、朝鮮での敗退が大和連合政權に大きな楔を入れ、いわゆる継体・欽明朝の内乱期に移行するのであるが、その時点はまさに後期古墳が発達し、群集墳が発展する時期なのである。激化する内部矛盾の中で、大和政權も、独立性を強めつつあった地方政權も、朝鮮からの富と技術奴隸の入手難を補うためにも、それに代る労働力と収奪を国家的に組織せざるをえなかった。屯倉・田莊ぢやうや部の設定が急激に増加する。それは村落共同体間の階層分化を激化させ、その構成要素としての世帯共同体は群集墳を作るような家父長的な大家族と劣勢な小家族とに分解してゆくのである。⁽⁴⁾」以上が群集墳とその時代の概観であるが、それを具体的な事例にしてみた。

ただし、考古学に関する私の理解や知識はまったく無であるから、以下も和島氏が述べられるままにこれを記してみる。氏は、「このような群集墳の形態が、古代社会成立期のどのような段階に照応し、共同体の変質をどう反映しているかを知る手がかりとして、さらい八世紀初頭のみ濃国加茂郡半布里はふりの大宝二年戸籍と、その他に比定される岐阜県加茂郡富加村羽生の地域の古墳群の性質を対比し、検討することができる。」⁽⁵⁾とされる。これは、私見に基だ重要と思われるので、引用が長くなるが、詳しく紹介してみたい。

半布里一帯に『群集墳が成立したのは六世紀に入ってからと考えられるが、五世紀に上述のような古墳を発達させたところだけでなく、周辺の丘陵のあちこち八区域にわたって、数基か十基あまり、多くて二十六基程度の横穴

式石室をもった小円墳が急激に造られていったのである。各円墳群の中に、直刀や馬具を収めた規模のやや大きいものが混っているが、（中略）この上円下方墳の造成はおそらく大宝二年の戸籍にある奴婢十三名と異姓の寄口（よぐち）を含めて、戸口四十四人を擁する県造のような階層がこの時代に現われてきたことと照合する事実であろう。県主（あがたし）のまじり族によって構成されているこの集団は、前述したような前方後円墳のある津保川左岸の各地域を足掛りとして、大宝二年の戸籍にある保の前身になるような、いくつかの世帯共同体の集まった集落を営んでいたものと思われる。（中略）

これらの群集墳が築かれた時期と、戸籍が作られた時点との間には一世紀ほどのズレはあるし、もちろんどの古墳群がどの集団と対応するかということは、あまり細かくいえないが、少なくとも次のことは考えられよう。一つは調査者が指摘しているように、「三ないし四基の古墳が密接な連体性をもちつつ、一基だけ盟主的古墳が存在する」⁽⁶⁾群と対照的に、等質の古墳が数基で群を成している事実である。これは（中略）、のちに郷戸として擱まれるような家父長的な世帯共同体の中に、階層の分化がすでに激しく現われていることを示すものであろう。次に戸籍との関連において追求すべき問題は、世帯共同体の全員が群集墳に葬られたかということである。（中略）大宝二年に十一保五十八戸に編成されたうち五十四戸分の総戸口は一一〇四人であるから、人口が百年以上をさかのぼってもたいして変らないとすれば、群集墳が造られた約一世紀にわたる死亡者はその数倍に上るはずである。一方、確かめられたかぎりでのこの地域の古墳数が約九十とすれば、古く破壊されて知見に上らなかつた数を相当見込み、また小規模な石室でも平均十人を葬ったとしても、この集落の全員が古墳に埋葬されなかつたことは推察するにたかくない。（中略）有力な戸主とその家族に限られたことが察せられる。（中略）このような推察に大きな誤りがないとすれば、群集墳は階層分化が進行中の、有力な世帯共同体の家父長と、その直系傍系の墓ということに

なる。』。以上である。

右に具体的例を通してみた半布里における有力家父長家族の成長↓群集墳の発生という事実は、当里の十五戸に及ぶ県主族集団の存在とまったく無関係ではあるまい。当里で九等戸の記入の判明できる四十二戸のうち、富裕戸と思われる下中戸以上の戸は十二戸あるが、その三分の一にあたる四戸を県主族で占めており、この県主族の祖先達こそ群集墳の被葬者にふさわしいのではないか。この祖先達は階層分化によって、有力な家父長制的世帯共同体を実現し、共同体の上層部におどり出た者たちであつたろう。そこで県主は、激しい階層分化の中から共同体支配に對立するものとして上昇してきた有力家父長家族を、單なる族長という従来の支配様式では律しきれず、また、彼の一族の中にも半布里の県造のごときものが大をなすに至つたため、族長⁽⁸⁾県主は、有力家父長家族層を自身の支配体制を支える手段として、自己の擬制的同族組織に編制することによって、支配基盤たる群小共同体の分解と動搖を防ぐとともに、族長権をおびやかす程に成長してきた県造のような同族や、村落首長層に對する牽制力としたのである。美濃の県主の族民が県造族とは表記されず、県主族と呼称されているのは、県主の首長制を支えていたからである。従つて、県主は、族長県主―分枝的県主・県造―県主族―県主人という重層的同族關係のうちに、共同体支配を維持しようとしたのである。すなわち、社会の根底から激動している歴史状況を背景として、族民の実態が形成されてきたといえよう。

族民の起源に直接関連するものではないが、私のような理解の仕方は、和島氏が、「いわゆる継体・欽明朝の内乱期から大化改新に至る国内体制の再編成の過程は、このような群集墳が表徴するような、成長しつゝあつた家父長制家族を擲み、それを通して分解する共同体を再編成し、統一する努力であつた。」⁽⁹⁾と言われるのに略々沿つたものであり、さらに明確な指摘として門脇氏が、『配下の共同体内部における家父長制の発達に伴つて「豪族」(わたくし

では共同体の首長」と共同体成員との矛盾が尖鋭化する。そうした時期になって「豪族」は初めて共同体諸関係の外部で支配者相互間の体制をつくる。これがカバネを与えるというかたちであられる。それと全く同一の過程で、首長の一族または共同体内部の有力家父長が、擬制的な血縁関係で結集してゆく。このように歴史的に形成された共同体の従属的形態をとる小集団が「族民」である。したがって、かれらは非「族民」の共同体成員と対立するかたちでかれらの共同体成員権を自らの手中に収めてゆく。カバネ姓者（共同体または小共同体の首長）との同族関係が強調されるのはそのあらわれである。』⁽¹⁰⁾（一）及び傍点は門脇氏といわれ、同様に原島礼二氏も「五世紀後半以来被支配共同体内部にも家父長制的世帯共同体が成立してきた。（中略）、従来支配集団の成員に限られていた小墳丘墳の築造権を彼らの一部にも与えて兵士に編成すると共に、彼らを変容しつつある農業共同体支配の末端に位置づけたのではなからうか。」⁽¹¹⁾と主張されている。六世紀における有力家父長家族の出現と群集墳の築造は、共同体の分解に対応し、それに対処する豪族の共同体支配体制の再編成の試み、共同体の外部では、継体・欽明朝以降の朝廷による支配体制の再編制（カバネ制度の拡大、官司制の採用、天皇親衛軍Ⅱ宮号舎人の設置、屯倉や部の大増設、日置部・日祀部等の設置や中央祭官制整備によるイデオロギー支配など）、つまり、王室・朝廷内部の紛争、吉備・筑紫・上毛野の反乱、任那の失地、また豪族内部では族長権をめぐる内訌という事件に表徴される古代の大転換期（所謂大化前代の史的意義については、石母田氏執筆「古代史概説・推古朝前後―国家の起源―」（『岩波講座・日本歴史』）に詳しい。）に、族民の起源・発生を予想する私見にとつて、右の諸家の指摘はきわめて有意義である。

それなら、次に八世紀の籍帳に現われた族姓戸は、いかなる家族形態をとっているかを調べてみよう。まず、美濃国味蜂間郡春部里の国造族集団は、「有力な家父長制的世帯共同体が結合した春部里の支配者集団」⁽¹²⁾であり、「国造族の家族構造の多くは、決して先進的家族構造ではない。むしろこの里においては、後進的な家族構造のは

うが支配的である。」⁽¹³⁾と、門脇氏は述べられている。氏は、加茂郡半布里の県主集団（県主・県造・県主族）の家族構造についても、「基本的構成単位は、家父長制的世帯共同体なのである。」⁽¹⁴⁾と判定された。しかるに、国造族・県主族の家族構造は、群集墳を築いた家父長制的世帯共同体の形態をよくとどめているものといえよう。

ただし、大嶋郷の孔王部集団のそれと比べ、等しく家父長制的世帯共同体の段階にあって、家父長制的統制が強化されているらしいのであって、しかもその家父長制的世帯共同体が自立的なのである。⁽¹⁵⁾大嶋郷戸籍は、まともに現存していながら、族民が皆無であるのは、当郷に「群集墳の発達はみられず、石室墳が一つ残っているだけである。」⁽¹⁶⁾ことと無関係ではあるまい。

また、越前国江沼郡山背郷の二戸の江沼臣族の家族構造も、明らかに家父長制的世帯共同体と認められるものである。ただ、京畿の族姓戸は、家父長制的世帯共同体の形態をとるものもあれば、家父長家族の構造をとっているものもあるという具合に、変則的である。これは先進地帯の地域性を考慮させるものであろう。以上、少なくとも、美濃・越前における族姓戸の家族構造は、群集墳時代のそれをよく遺存しているものといえよう。

さて、第二章の(二)において、族民がカバネ姓者と軍事的にも同族関係にあったことを述べたはずである。それについて興味深い見解がある。それは、門脇禎二・甘粕健両氏の共著『体系・日本歴史1・古代専制国家』に、「人民の武装」という小項目を掲げて陳述されているものである。また長い引用になるが、重要と思うのでこれを紹介する。

「いま一つ、群集墳の形成が政治過程に投げかける問題——とくに人民の武装という問題をみておきたい。

各地の群集墳には、おびただしい量にのぼる鉄製武器が副葬されている。先述したように、大古墳にみられた武器の大量埋納が五世紀後半いらい減少するのと逆に、こういう現象が進行したのは、明らかに軍事編成の変化を示

唆する。すなわち、各地の王が多量の武器を直接掌握し必要に応じて共同体成員を武装させる体制から、常時武器を保有する人民によって軍事組織が編成される体制への変化が生じたと考えられる。（中略）。群集墳発生の直接契機はつぎのように考えられる。つまり、ヤマト政権および、それに連なる地方政権が、家父長制的成長をとげつつあった上層農民の一部に、日常的な武器の保有を認め、国家権力の末端につらなる特権的な身分の表示として古墳の造営を許すとともに、これを自らの私兵として掌握することによって権力の基盤を強化しようとしたことにもとめることができる⁽¹⁷⁾。即ち、「群集墳の副葬品に武器や馬具がめだってきたことは、地方豪族やその配下の有力家父長層の武装化が進展したことを意味する。（中略）。農業共同体の成員たちの間で、群集墳を築きうるほどの有力農民層の男子に、兵役権が一つの特権として固定しはじめ、それを基本とした地方豪族の恒常的軍事編成がすみはじめた⁽¹⁸⁾。」というのである。

右に紹介した門脇・甘粕両氏の「群集墳発生の直接契機」に関する見解は、少しく問題があるとしても、一部の「人民の武装」とそれが豪族の恒常的軍事力の一斑になったとする見解は、大方支持すべきものであると思う。

そうであれば、「家父長制的有力家族の成長→群集墳への武器の副葬→有力家父長家族の武装化→族民の軍事的性格」、この一連の關係は、族民という豪族の擬制的同族の実態が、いわゆる大化前代にあたる六世紀を中心にして形成されたということ。つまり、族民の起源をこの時期に求めることが、可能となってくるであろう。思うに、族民の起源は、直木氏がいわれる三・四世紀ではなく、井上氏や平野氏が主張される七世紀後半でもないようである。

六世紀を中心とする所謂大化前代という時期は、生産力の急激な発展により、群小共同体内部に階層分化が激化し、その中から家父長制的有力家族が、共同体の一般成員と、時には豪族と対立するものとして、共同体の上層にはい上り、豪族の支配基盤たる群小の共同体をその内部から分解させ始めたのである。このような社会の根底から

涌上る力は、ただちに大和朝廷の支配体制をゆさぶるものに跳上り、大王も豪族も支配体制の再編制を迫られてきた。ここに大王は諸豪族に対する支配を秩序づくべく、カバネ制度の全国的拡大を試み、一方、豪族は成長してきた有力家父長家族を自身の擬制的同族に組み込み、その組織された経済力と武力をもって、親族・同族であるカバネ姓者や村落首長層に対する牽制力としつつ、より強固で安定した家父長的族長支配体制を実現しようと努めたと同時に、動揺している諸共同体の分解を防ぐとしたのであった。族民の起源はこういうところにあったのである。

かようにして族長を頂点とし、群小共同体の有力家父長家族層を底辺とするピラミッド型の重層的同族組織が形成され、豪族の支配体制は、擬制された同族の原理をとりつつ、新しい段階へ発展していった。それはなにも族民を有する豪族に限られたことではなく、大王氏族が官号舍人Ⅱ親衛軍を設置して大王権力の高揚をはかったことや蘇我氏が倭漢氏を経済的・軍事的にあたかも同族的従属集団のごときものに組織したことなど、いわゆる大化前代における諸豪族の富国強兵策の動きとあい通ずる現象なのである。ただ、族民を有する豪族は、擬制された同族の原理をとっている点が、蘇我氏を始め中央の大豪族が、倭漢氏や複姓の同族的擬制を伴わない従属集団を有して官制的方向をとっているのに比べて、一步遅れているに過ぎないというだけである。

また族民の起源に話を戻すと、さまざまな段階において支配体制の再編制が行なわれ、共同体内部に盛んに屯倉・田荘・部が設定される時になって、支配者と共同体成員との対立は深化する。ことに、独立的農業経営と武装化を実現しつつある有力家父長家族層の実力を看過するわけにはいかない。こうした歴史状況を考えるなら、六世紀頃に族民の起源を求めることは、あながち無理ではないと思う。

当初は、豪族の支配に対立するものとして現われ、独立的地位を築きつつあった新興の有力家父長家族は、大きな歴史の潮流の中にいつしか豪族支配階級の末席に編組され、すなわち首長制を支える族長の親衛隊的な擬制的同

族集団となり、小共同体内部においては、豪族の同族であるという特権的成員権を獲得した支配者集団として、他の一般成員に対して排他的性格を形成していった〔問題の設定〕の註1を参照）。いいかえれば、豪族との関係においては、首長制を支える擬制的同族として、豪族団の下位身分の構成員であり、小共同体内部では、特権的支配者集団という性質を基本とするのが族民である。

群集墳を築造した新興の独立武装農民が、擬制的同族集団として豪族支配階級の末席に編組され、豪族の富国強兵策の中にその経済力と武力が吸上げられていったが、それは成長しつづつあった人民（一部ではあるが）の全面的敗北ではなかった。豪族は彼らを同族集団に編制することはできたけれど、これを自身のまたは皇室・朝廷の部に設定し、露骨な収奪を加えることはできなかった。部十族の呼称がないのはこれがためであろう。なお、美濃国味蜂間郡春部里の国造族集団について門脇氏は、「倭政権がこの里に春（日）部を設定しようとしたとき、すでに本巢国造は、その基礎集団の一個（春部里）の全体を名代として設定し難い事情になっていた⁽¹⁹⁾」といわれている。

群小の豪族が、大化前代という変動期を生抜き、その中で一段と強固な古代豪族に成長するためには、新興の有力農民層の協力が必要としたはずであろう。従って、族民と豪族が政治的・軍事的・祭祀的同族結合の要素を有するようになるのは、時代の必然的要求であったと思う。村落の排他的上層集団、壬申の乱従軍の有位有に族民が多いなど、八世紀の史料から知られる族民の在方は、六世紀を中心に形成されたものの遺制と考えられるのである。

しかしながら、注意すべきは、現存史料にみる限り、(A)族民の分布は広汎にわたるといっても、畿内及びその周辺地域と出雲に多く、三河以東の東海道と吉備・筑紫には僅少あるいは皆無であること。(B)宿禰以上のカバネには族字が付せられず、国造クラス及びそれ以下の中小豪族のカバネに族字が付されていること。この二つの問題は、どう説明したらよいのであろうか。(B)の問題は第四章に後述する)。

（二）族民の分布と族民發生の三条件

(A)の族民の分布に関する問題について、井上・平野両氏はあまり論及されていないが、史料の特殊性として片付けてしまわずに、直木氏が実行されたように、やはり考えてみるべき重要な問題と思う。それで、ここでは、族民のいる地方とない地方の歴史性を考えながら、同時に族民が發生するに必要な歴史的条件について論じてみることにする。

ところで、直木氏は族民の分布状態について、「注意せられる点は、族民の多い地方は日本の大陸進出以前のかなり古い時期から朝廷に服属していた地域であるのに対して、族民の少ない地方は、同じく大陸進出以前から朝廷に服属していたにしても、その後の服属の仕方が族民の多い地方と異なっていることである。どう異なっているかというと、大陸進出が一応終了したあとの五世紀後半ないし六世紀以降に、朝廷の支配が改めて強化されているのである。ことに前者の地域が概ね従順に朝廷の統合に服していたのとは⁽²⁰⁾反対に、後者に属する吉備と筑紫の地域が朝廷に向って度々反抗を試みていることは、大いにわれわれの関心を誘う。」と述べられている。族民の分布状態を、五世紀後半から六世紀にかけての歴史的状况の中で論証されようとする直木氏の方法に全面的に服したいが、しかし同じ方法を使いながらたどり着いた結論は、大いに違うものになってしまった。

氏が、「族民を部民制普及以前の豪族団の下部組織⁽²¹⁾」と結論されたのには、どうも服しがたい。私の考えでは、族民は部民制に先行するものではなく、地域によっては後行、あるいは併行して現われてくるものだからである。前述のように、六世紀を中心に全国的規模で爆発的に出現した群集墳の营造者たる有力家父長家族が、豪族の擬制的同族集団に編制されたのが族民であるならば、族民の分布と群集墳の全国的分布（地域性があるが）は一致せぬ

ばならない。しかしながら、両者の分布は必ずしも一致しない。これを史料的制約といえはそれまでだが、なんらかの歴史的事情があるような気がする。

(a)、先ず、三河以東の東海道諸国についてであるが、この地域にも群集墳は存在する。しかし、「養老五年下総国葛飾郡大嶋郷戸籍」・「天平十年三河国正税帳」・「天平十一年伊豆国正税帳」・「天平十二年遠江国浜名郡輪租帳」（以不「浜名郡輪租帳」）から多数の人名が知られるにもかかわらず、族民は皆無である。直木氏は、この地方の国造が多く直をカバネとしており、五・六世紀以降の部民制の盛行期に朝廷の強い支配を蒙ったため、族民組織が破壊されたからであるとされる。氏の意図されるところは正しいであろうが、族民組織が破壊されたからではなく、元々、この地方に族民組織は存在しなかったからだと思う。

この地方にも群集墳が存在しているのをみれば、それを営んだ有力家父長家族が当然出現したであろうが、東国に階層分化がおこり群集墳が盛行するようになるのは、例えば、「関東において大化以後若干のあいだ盛行期の継続をみる⁽²²⁾」という具合に、七世紀以降であって、東国の共同体が部に設定されてから一世紀以上も経過している。従って、該地方に自律的階層分化が起る以前の早い時期に、人民の多くが部民化されていたため、族民が発生する余地がなかったと思う。

例えば、「浜名郡輪租帳」に族民はみあたらないが、浜名郡の群集墳は、「後期古墳に属する小円墳は、湖北に一三八基、湖西に一八基、湖東に一六基、計一六二基が分布しているが、その大部分は都田川の小平地を背景として後・Ⅲ・Ⅳ期に展開している。」⁽²³⁾らしく、七世紀中葉前後から後半を中心にして、八世紀の初めまでに築造されたもので、畿内に比べ盛行期が一世紀も遅れている。甚だしいのは、大嶋郷の孔王部集団は、これといった階層分化がみられず、その証拠に、当郷には、「群集墳の発達は見られず、石室墳が一つ残っているだけである。」⁽²⁴⁾これ

は、朝廷の強い支配による共同体の自律的發展の停滯を物語る。

即ち、当該地方に族民が存在しないのは、階層分化が起り有力家父長家族が出現する以前に、人民の多くが部民化されていたからである。そして、その後、部民間に階層分化が起り、群集墳を営むような有力家父長家族層が出現し、豪族となんらかの関係を有するようになったとしても、既に某部という名が冠せられている以上、造籍の過程で改めて族姓を付与する必要はおこるまい。私は平野氏の主張を受けて、族民は族姓付与以前は無姓だったと考えている。要するに、族民は「(イ)階層分化という条件」の未熟なところには発生し難い。これは、族民の分布が畿内とその周辺にみられ、いわゆる辺境地帯に少ないことと無関係ではない。

一例を挙げれば、ともに天平二年の「安房国義倉帳」（長狭郡か）と「越前国義倉帳」（丹生郡か）の九等戸を對比すると、第四表にみるごとく、越前の方がはるかに多階層であるのみでなく、安房では等外戸が全体の七九・〇七パーセントと少ないのにくらべ、越前では九〇・三七パーセントも占めている。これは越前の「貧富階層分化発

第四表 九 等 戸			
	九等戸	越 前	安 房
等 内 戸	上 上	1	
	上 中	4	
	上 下	7	
	中 上	4	
	中 中	5	2
	中 下	8	2
	下 上	11	3
	下 中	13	11
	下 下	45	69
	小 計	98	87
等外戸		920	327
	總計	1018戸	414戸

展の方向を示すもの」⁽²⁵⁾であろう。越前は北陸道きつての先進国であり、また富裕な国という評判の高いところでもあって、その越前に江沼臣族という族民が居住しているのは、族民が階層分化に照応して発生したことの傍証となるであろう。

さて、東国に族民が存在しない理由は、右のほかに「(ロ)首长制の発展という条件」の欠如が挙げられる。すでに第二章の(二)において、族民は地域的首

長制の発展に対応しつつ発生し、その首長制を支える勢力として、首長が政治的意図のもとに有力家父長家族層を同族組織に編制したものであるということを述べておいた。ここでは、若干の例を挙げながら、族民と首長制の關係をもう一度確認整理してみたい。

族民を有する豪族は五十八氏にのぼるが、その中で臣・君姓の豪族が二十七氏で半数近くを占めており、直・造姓はそれぞれ六、二氏と非常に少ない（第二表参照）。このことは、いま問題にしている東国に族民が存在しないことと脈絡があるようである。いわゆる東国の国造は、毛野氏を例外にほとんどカバネ直を称し、等しく直をカバネとするといっても、西国の国造が、大倭・山背・河内・紀・紗拔等、地名を冠しているのとは違って、多く名代・子代などの部名を負い、地域的君主としての自立性を疑わせるものがある。しかるに、こうした「朝廷への隷屬度の一濃厚なる地域」⁽²⁶⁾に首長制が大いに進展したとは考え難いのである。そうであれば、豪族の側からいっても、東国社会の後進性や朝廷の強力な支配によって、支配基盤の動揺や有力家父長家族層の抵抗にあうことが少ないのであるから、支配体制の強化や再編制を企画する必要はなく、伴造・伴造的国造として朝廷に従順にしておりさえすれば、彼らの地位と支配は安泰であるはずであって、首長制の発展や豪族としての自主性を支える族民組織を編制する動機は起り難いのである。

ところが、尾張・美濃以西を除く東国で唯一の族民が存在する。それは上毛野君族であるが、上毛野君はいかにも立派な古代豪族であり、一族と見られる石上部君・朝倉君・井上君・佐味君などの上に、上毛野における家父長的な首長支配を実現していたものと思われ、そうした「⁽²⁷⁾首長制の発展という条件」を満たした豪族が族民を有しているのは、注目すべきことである。ただ、平野氏は上毛野君族を帰化人田辺氏変するところの族民ではないか、とされているが、そうでないことは註に述べておいた。⁽²⁸⁾

(b)、次に、吉備・筑紫に族民がいない歴史的事情を考察してみよう。吉備に族民がいない理由を、直木氏は、吉備は早くから族民組織が崩れる状態にあったのだが、それを早め徹底的にしたのは、吉備の反乱とその後の朝廷の圧迫であったと言われる⁽²⁹⁾。また、氏は筑紫についても、「吉備の場合と同じく、朝廷の支配力が五、六世紀以降に強く及んだことが、筑紫に族民の少ないことの大きな原因となった⁽³⁰⁾」とされる。氏の視角にはほとんど異存はないが、「吉備は早くから内部的に族民組織の崩れる状態にあった⁽³¹⁾」と、ここでも族民組織↓部民制という図式をとっておられるのには、従いがたい節もある。

ところで、吉備氏は古い伝統を有する大豪族であるが、雄略朝に下道臣前津屋、上道臣田狹、星川皇子と組んだ上道臣など、朝廷への反乱伝承を持っている。雄略天皇は五世紀末に近い頃の天皇であるが、その頃「岡山県南部では、前・Ⅲ期―Ⅳ期のころからすでにいくつかの群集墳が形成されはじめて⁽³²⁾」のである。前・Ⅲ期（五世紀前半が中心）、前・Ⅳ期（五世紀後半が中心）は倭の五王の時代であり、大古墳についても、「四世紀後半から岡山県南部の古墳文化が、とくにその墳丘の規模において他地域をはるかに凌駕してくることを指摘したが、五世紀になるとその傾向は一段とすすみ、ついには倭の大王陵に匹敵する規模の巨墳をきずくにいたるのである。」と、古墳文化にみる吉備氏の強大化と、吉備社会の階層分化による有力家父長家族の発生は、略々期を同じくしている⁽³³⁾。これから臆測するに、吉備氏は、五世紀中葉頃から成長しつつある有力家父長家族層を、擬制的同族組織に編制し始め、雄略朝の頃には、朝廷に拮抗しうる実力を背景として、反乱伝承を生み出したのであろう。吉備では、すでに五世紀中葉頃からある程度族民組織が形成され、吉備氏の恒常的軍事力の一斑をにないつつあったかもしれないが、安閑・欽明紀には、この地方に多数の広大な屯倉の設置記事がみえることから、反乱後は、厳しい朝廷の支配、圧迫を被り、族民も一般成員もその多くが部民化されたため、後の史料に族民を検出できない理由なのかもしれない。

れない。

従って、直木氏が反乱と朝廷の圧迫により族民組織が解体され、部民制にとってかわったとされるのは、この吉備の場合では正しい見解であろうが、吉備氏の族民組織の編制は、三・四世紀ではなく、五世紀中葉または後半の頃と考える。それに、族民組織発生以前から既に吉備氏は部分的に部の設定を許しつつ、朝廷に服していたはずであらう。であれば、族民は必ずしも部民制に先行するものではないのである。

今度は、北九州に族民が少ない理由を考えてみると、この地方の族民には、「天平五年山背国愛宕郡計帳」に宗方君族（本拠は筑前か）、「大宝二年美濃国本簀栗栖田里戸籍」に阿蘇君族（本拠は肥後か）がみえ、同年の「豊後国戸籍」には茨田連族（本拠は河内か。山背国紀伊郡大里郷にも居住している。）と海部君族を知る。しかし、大宝二年の「筑前国嶋郡川辺里戸籍」・「豊前国上三毛郡塔里戸籍・加月久也里戸籍」・「豊前国仲津郡丁里戸籍」には、族民は皆無である。この事実の背後には、それなりの歴史的事情が存在するはずであらう。

この地方の群集墳について和島氏は、「北九州の群集墳は、横穴式石室や横穴や箱形石棺の群として認められるようであるが、これまで群として調査された例があまりない。」と言われる。これをもって、古くから畿内と対峙する北九州に階層分化が未発達であったとすることはできない。それに、「群集墳の発生は、家父長制家族の抬頭を前提とするが、逆に家父長制家族が発生すれば、ただちに群集墳が発生するとはかぎらない⁽³⁵⁾」ということも注意しなければならない。

推察するに、筑紫に族民が少ないのは、直木氏が言われるごとく、磐井の乱とその後の朝廷の圧迫のせいであろう。継体朝の磐井の乱は、国際情勢緊張化に対応する大和朝廷のたび重なる朝鮮出兵に応じてきた「北九州の豪族・農民たち」の「鬱積した不満が爆発したので」⁽³⁶⁾あった。筑紫君という大豪族の族長磐井の族民として、磐井と

ともに戦った有力家父長家族は、鎮庄後、筑紫・豊に広く諸屯倉が設置されたと同じ頃、多く部民に編制されてしまったのではなからうか。川辺里に〔筑前国嶋郡川辺里戸籍〕中央豪族系の種々雑多な部が設定されていることは、その一斑を物語るものであろう。

その証拠に、北九州の族民を有する豪族は磐井を鎮庄する側にまわっているらしいのである。先ず、宗万君族は朝鮮経営の守護神宗形三神を祭る宗形君の族民であれば、朝鮮経営に必ずしも不満を抱くことはなく、むしろ宗形君はそれが活発化することによって、宗形三神の崇拜と地位が向上するのを歓迎するはずである。海部君族を有する豊後の海部君は、水軍としてどちらかといえば、半島出兵に協力した方であらう。また阿蘇君族を有する阿蘇君は、宣化紀元年五月辛丑条に、「朕遣阿蘇仍君、末詳、加連河内国茨田郡屯倉之穀。」とみえ、茨田屯倉の穀を筑紫まで運んでおり、朝廷の屯倉経営と軍糧輸送に一役かっている。北九州の豪族ではないが、「大宝二年豊後国戸籍」の茨田連族を有する茨田連も同様な例であらう。

ついでに言うと、豊後に茨田連族が居住しているのは、族民発生の時期を考える手懸りとなる。「大宝二年豊後国戸籍」はすこぶる断片的史料であるが、その中に茨田連族・川内漢部・阿曇部・海部君族など屯倉に関係ありそうな氏姓が散見する。そして、安閑紀には、豊国に勝崎・桑原・肝等・大抜・我鹿の屯倉を設置したという記事があり、⁽³⁷⁾ 黨弘道氏の説に従って、犬養氏が屯倉の守衛を職掌とするものであるならば、大分県大野郡には犬養町なる町があり、犬養氏には安曇・犬養連・海・犬養連・海・犬養の一派がいるので、当戸籍にみえる氏姓は、いよいよ屯倉との関係が密接になってくる。思うに、豊後に茨田連族が居住しているのは、六世紀頃豊国に屯倉が設置された際、茨田屯倉の管理者茨田連とともに、河内から移住してきたからではあるまいか。そうだとすれば、すでにその頃茨田連は後世茨田連族と呼称される族民を有しており、その擬制的同族を屯倉支配管理機構の中に組織していたと考

えられ、族民の起源を六世紀に求めうる傍証となるであらう。

さて、右に吉備と筑紫に族民がいない理由を、反乱と朝廷の圧迫に追求してきたのであるが、等しく反乱伝承を有する出雲に族民が多いのはどうしてなのだろうか。つまり、反乱伝承の有無のみでは、族民の分布状態を説明しきれないのである。それで、次に出雲と吉備という背中合わせの両社会の在方を比較検討してみることにする。

まず、「風土記」、「計会帳」、「歴名帳」等をもとにして、出雲の氏族構造を調べてみると、次のように多く（部）臣—（部）首—部という整然とした構造をとっており、これは井上氏の指摘⁽³⁸⁾どおり出雲の勢力が朝廷に服属した際、出雲の社会秩序が破壊されず、そっくり部体制に組込まれたからにはかならない。また出雲には、屯倉の設置が少ないことも吉備にくらべて特徴的である。

建部臣—部首—部 勝部臣—部首—部

日置部臣—部首—部 日下部臣—部臣—部

物部臣—部首—部 出雲臣…積首—積…部

海臣—部首—部 語臣—部首—部

神門臣—首—臣族—神門—部

ところが、「天平十一年備中国大税負死亡人帳」を中心史料として、吉備の場合をみると、左記のように（部）臣—（部）首—部という整然とした氏族構造は希で、（部）首—部、（部）直—部というのが多数を占めている。これは、断片的史料にもとづいているとはいえず、志田諄一氏の「吉備における部の伴造は、主として吉備臣やその同族以外のものを任ずるという朝廷の政策があったことが推測される。」⁽³⁹⁾という見解を妥当にさせる。

白髪部臣―部首―部 瓊王部臣―?―?

建部臣―?―部 津臣―?―?

?―赤染部首―部 ?―犬甘部首―部

?―生部首―部 ?―服部首―部

?―輕部首―部 ?―私部首―部

?―美和（神）首―神人部

吉備海部直―部首―部 語直―?―?

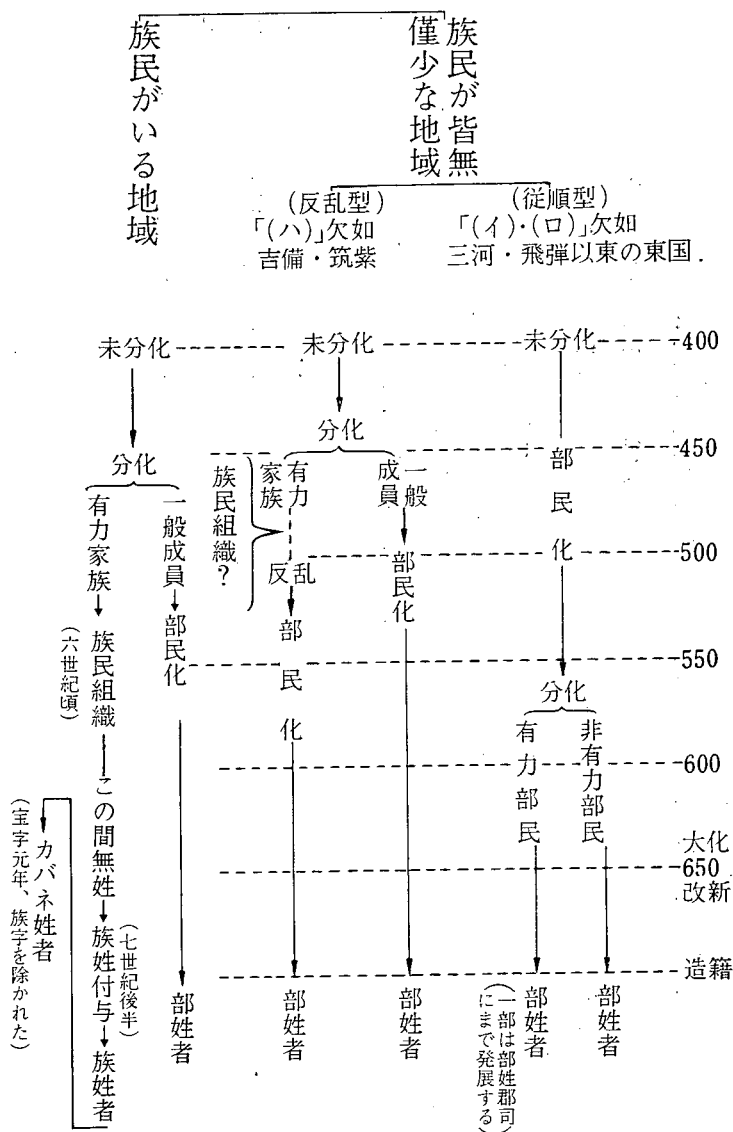
山吉直―?―山守部 中臣忌寸連―?―?

弓削部連―?―?

（志田諱一氏著『古代氏族の性格と伝承』「三 吉備臣」二五六―一六一頁を参照した。）

思うに、元々、吉備には臣（吉備氏）―首（村落首长層）―部曲なるヒエラルヒーが存在していたであろうが、それが吉備氏の反乱後に分断されて、朝廷―部首―部という体制に改変されたものではあるまいか。つまり、吉備氏と村落首长層の間に朝廷は楔を打込んだと同時に、吉備社会の奥深く踏込んで、村落首长層をじかに把握するという徹底した支配体制を敷いたものと考えられる。その際、吉備臣―族民という族民組織も破壊され、屯倉の設置に伴って、族民はほとんど部民化されたのであろう。

即ち、同じく反乱伝承を有するといっても、古い社会秩序が破壊されなかった出雲と上毛野には族民が存在し、そうではない吉備・筑紫には族民が皆無、僅少なのである。それで、族民が発生し、それが存続するためには、「(ハ)地域的な古い社会秩序が破壊されていないという条件」が挙げられると思う。



以上、族民の分布状態についてその歴史的事情を叙述してきたのであるが、今これを要約すると、族民が発生し存続するためには、「(イ)階層分化という条件」、「(ロ)首长制の発展という条件」、「(ハ)地域的な古い社会秩序が破壊されていないという条件」が必要であり、尾張・美濃以西を除く東国に族民がいないのは、右の「(イ)・(ロ)」の条件が欠如していたため、また、吉備・筑紫にも族民がいないのは、「(ハ)」の条件が反乱によって破壊されたからである。そして、叙上のことを図式化すると右のようになる。（分化、未分化とは、階層分化のそれである。）

第四章 族姓付与の起源

旧稿では、族姓付与の起源を、「壬申の乱に吉野方として従軍した中小豪族の同族に対する行賞という点に族姓発生 of 歴史的要因を求め、八色姓制定の時点で始めて彼らに族姓が付与され、（中略）。その後の造籍の過程で、多くの無姓の農民、また日本の氏もカバネも持たない帰化氏族に対して一斉付与が行なわれた」としたのであったが、その後、二、三の方々から御批判・御教示を受け、また自分としても、美濃の族民だけの考察から、族姓付与という全国的な事業を説明するのは、強引であるように思われ、考えも変ってきたので、先の意見は撤回したいと思う。しかしながら、それに代る案は持たせていないが、族姓付与の起源は、直木・平野両氏の説に従って、庚午年籍・庚寅戸籍に始まるのではないかと推測する。以下に少し所感を述べてみたい。

先ず、天武八姓の真人・朝臣・宿禰には、族字が付されていない事実についてであるが、臆測するに、例えば、天武八姓制定の時点で、物部連が朝臣を賜姓された際、その族民が物部朝臣族とならなかった理由は、既にそれ以前の造籍の過程で、族民は物部連族という呼称で登録されていたため、改めて物部朝臣族とする必要が存しな

第四表 新旧のカバネと族字

伊蘇志	山背	阿刀	掃守	白髮部	宗方	上毛野	尾張	他田	物部	菟道	太	栗田	栗田	氏
檀原造	直	連	連	造	君	君	連	臣	連	連	臣	直	臣	旧カバネ
伊蘇志臣	忌寸連	宿禰	宿禰	連	朝臣	朝臣	宿禰	朝臣	朝臣	宿禰	朝臣	忌寸	朝臣	新カバネ
天平勝宝2	天武1412	天武13	天武13	天武12	天武13	天武13	天武13	養老元	天武13	天武13	天武13	?	天武13	賜姓時
伊蘇志臣族	忌寸族	連族	連族	造族	君族	君族	連族	臣族	連族	連族	臣族	直族	臣族	族姓

つたからであろう。なぜなら、私は平野氏に従って、族民は元来ウジ・カバネを持たない無性の農民であったと考えているので、族民に族姓を付与するのは、戸籍に登録すること、が第一義であって、物部連が朝臣を賜姓されたのとは、登録と賜姓という点で質的な違いがある。たとえ、物部連の一部が朝臣を賜姓されたからといっても、その族民は既に物部連族として戸籍に登録され、その時点で族姓付与の目的は終了しているのだから、朝臣族に改姓する理由はなにもない。つまり、族姓付与は戸籍制を完全にするための処置なのであって、賜姓や改姓とは無関係なのではあるまいか。

その証拠に、族字ほとんど天武十二年以前の旧カバネに付せられている。それを表示すると（第四表）、山背忌寸族・伊蘇志臣族を例外に、族字はあたかも賜姓・改姓とは無関係に、一様に旧カバネの下に付加されているのであって、「八色姓の制定された天武天皇十三年は、族姓成立の時期の上限であった」というより、むしろそれ以前から族姓が付与されていたように思われる。おそらく、庚午年籍が作製された時、それまで無姓であった族民は始めて戸籍に登録され、族姓を付与されたのであろう。例えば、尾張連の族民は尾張連族となったのである。ところが、天武十三年の八色姓制定の時、尾張連の一部が宿禰を賜姓され、他の

尾張連は旧姓にとどまったままで取残されてしまったのである。その場合、取残された一団よりも下位身分の尾張連族が、宿禰族を賜姓されることはとうていありえないことで、宿禰以上のカバネに族字が付されていないのめかような理由によるのであろう。

しかしながら、庚午年籍の時点では存在しなかったはずの忌寸というカバネに族字を付した例が一件ある。それは山背忌寸族であるが、山背忌寸は元々山背国造山背直で、天武十二年に連、同十四年に忌寸と順次賜姓されたものであれば、山背直族とあるのが本当なのに、こればかりはどうも解せない。

もう一つ問題なのは、族姓付与があたかも賜姓のごとくみえる伊蘇志臣族の場合である。それは、『続日本紀』の天平勝宝二年三月戊戌条に、「駿河守從五位下檜原造東人等。於部内盧原郡多胡浦浜、獲黃金_三猷_三之。練金一分、沙金一分、於是東人等賜勳臣姓_二とあり、一月後の五月丙午条には、「伊蘇志臣東人之親族卅四人賜姓伊蘇志臣族_二と見え、族姓付与が一種の行賞のごとく表現されている。

しかしながら、檜原造東人が勳臣を賜姓された天平勝宝二年三月以降の記録には、檜原造という氏姓是一件もみえないのをみれば、檜原造全員が勳臣になったものようである。もしそうであれば、檜原造東人の族民は、元々、檜原造族を称していたが、東人を始めその親族がすべて勳臣を称するに至っては、檜原造なる氏姓は消滅したに等しく、ウジ・カバネを同じくするカバネ姓者の同族の標識である檜原造族という族姓は、宙に浮いてしまい、もはや存在しない氏姓に族字を付していたのでは、どこの族氏なのか紛らわしい。そこで、東人は彼等族民のために、伊蘇志臣族という新しい族姓を官に申請してやったのではあるまいか。

かように考えられるとすれば、伊蘇志臣族という族姓成立の事情は、現実的または戸籍上の便宜的処置であつて、必ずしも賜姓とは関係ないであらう。また、賜姓の制限によって、一部の檜原造だけが勳臣に昇格し、他の者

は旧姓のままで取残されたとしても、それより下位身分の族民が賜姓に与かつて、伊蘇志臣族となることは起りたい。そういう意味で族姓の成立が、天武八姓に伴なつて起源したとは考え難いのである。山背忌寸族という族姓成立の事情も、右の伊蘇志臣族と同様なケースなのかもしれない。

以上、山背忌寸族・伊蘇志臣族のように問題のある族姓を除けば、他はほとんど天武十二年以前の旧カバネに族字が付加されている。それで一応、族姓付与の起源は、無姓の族民に族姓を仮称させた庚午年籍への登録に発しているものと推測する。

ついでに族姓の終焉に言及すると、天平宝字元年四月辛巳条の大炊王立太子の勅に、A「其戸籍記_レ無姓及族字_二於_レ理不_レ穩。宜_レ為_二改正_一」とあるのをみれば、これを機会に族民は一斉に族字を除かれて自動的にカバネ姓者になった模様である。というのは、右の族姓廃止の一条の直前に、B「其高麗。百濟。新羅人等。久慕_二聖化_一。来附_二我俗_一。志_二願_一給_二姓_一。悉聽_二許_一之。」という帰化人に対する氏姓の大量付与に関する記事があるからである。

ただし、A・Bの文中、私が傍線を付した「姓」の字は、カバネのみを指しているというより、平野氏が証拠を挙げて主張されているように、ともにウジおよびカバネの両方を意味するものであり、特にBは、天武八姓の賜姓の原則を破って帰化人に対するカバネの無制限賜姓をしたことを表現するものではない。そうであれば、このBの記述をもって、八色姓の原則の全面的崩壊の兆しとみなし、それに直接続くAの族姓廃止の事情を、「八色姓の原則が全面的に崩壊しはじめると、族姓もまた史上から没し去った」とされる井上氏の見解は、必ずしも支持しがたいものとなる。

従つて、宝字元年の勅によって、族姓を廃止して、族民を一律にカバネ姓者にしたのは、八色姓や賜姓制度とは直接関係なく、むしろ戸籍上の「改正」という処置であつたにすぎないであらう。しかるに、すでに平野氏が論じ

ておられるごとく、族姓は、その発生から終焉に至るまで、ほとんど戸籍制度上の問題であつたと思う。

むすび

これまで論述してきたことを、ここで族民の歴史的意義も考慮しながら、簡単に要約してみよう。

先ず、八世紀における郷里の上層集団である族民は、ウジ・カバネを同じくするカバネ姓者の同族であるといつても、血縁的同族ではなく、元来、政治・軍事・祭祀的結合要素を基本とするほとんど擬制的同族であつた。そして、その同族結合が形成された時期は、いわゆる大化前代にあたる五世紀末から六世紀頃であつたのである。

それというのは、群集墳の事実が示すように、この時期に群小共同体の内部に激しい階層分化がおこり、その中から成長してきた有力家父長家族は、独自の農業生産を押し進めたと同時に、武装化を実現しつつあつた。一方、こうした支配基盤の動搖分解に直面した群小の豪族は、当然支配体制の再編制と強化を迫られることとなつたが、その時にはすでに、抬頭してきた有力家父長家族層の実力を無視して、彼らを一樣に部民化することは困難な情勢になつており、支配階級の内部でも族長権の争奪や固定化をめぐつて政治的にも内乱期を迎えつつあつたのである。

このように、古代の戦国時代の様相を深めつつあつた歴史的事情を背景にして、豪族の富国強兵策が進展し、その過程で有力家父長家族層は、首長制の発展を支える勢力として、つまり豪族の「政治的同族」として、擬制された同族組織に編制されていったのである。従来、地域的な支配者集団の盟主的存在にすぎなかつた族長が、親族・同族であるカバネ姓者集団と村落首長層を抑えて、その上に家父長的な安定した首長制とその世襲化を実現する

ためには、外からもそれを支えてくれるもの、即ち族民を必要としたのであり、それは、カリスマ的權威にもとづく古い支配形態から脱皮して、機構を通して支配していくという豪族の統治形態の発展を意味している。その証拠に、族字は多く氏族で最有力な旧カバネ、つまり族長のウジ・カバネの下に付加されている。例えば、牟義君・造・首という牟義地方のカバネ姓支配者集団の中で、族民を有するのは、族長牟義君であって、牟義君族という族民が、牟義地方のカバネ姓支配者集団の中でも、特に族長牟義君の首長制を支える勢力の一斑になっていたことが知られるのである。

右のように、有力家父長家族層が豪族の首長制を支える「政治的同族」に編制されたのであるなら、それに伴って有力家父長家族の持つ武力が、豪族の軍事組織に組込まれ、豪族の恒常的軍事力の一斑をになう「軍事的同族」としての要素を有するようになるのは、蓋し必然の勢いであった。この場合でも、その「軍事的同族」を直接把握したのは、やはり族長であったであろう。思うに、いわゆる継体・欽明朝の内乱や国造軍成立の背後には、かような地方豪族の恒常的軍事力の飛躍的充実という事情が存在したのである。一方、大化前代の内乱期の過程で、豪族軍の精兵を形成し下土官的役割をになった族民には、特権的な兵役権が固定していったのであり、その残映ともいべきものが、壬申の乱に従軍して叙位された美濃国戸籍の六人の族民有位者なのである。

有力家父長家族層が、豪族の「政治的同族」・「軍事的同族」に編制されると、そこには族長を頂点とする氏神祭祀上の「祭祀的同族」結合も形成されてくる。美濃の県主が県主族を、鴨県主が鴨県主族を、尾張連が尾張連族を、出雲臣が出雲臣族を、宗形君が宗形君族を、阿蘇君が阿蘇君族をという具合に、宗教的性格の濃厚な氏族がカバネ姓者―族姓者の構造を持っているのは、これを無視できない。しかもこの祭祀的同族化は、朝廷のイデオロギ―支配策や中央祭官制の成立と相通する諸豪族の富国強兵策の一環を形成するものであった。

以上が、族民の擬制的同族としての三要素と族民の起源についての要約であるが、現存史料にみる限り、族民は全国一律に存在しない。それで次に族民の分布状態の歴史的事情と、族民が発生するための条件について簡単に述べると、族民が発生しそれが存続するためには、先ず第一に、地域的な「(イ)階層分化という条件」が成熟し、有力家父長家族が広汎に出現していることと、「(ロ)首長制の発展という条件」を満たしえる地域的君主としての独立的豪族が発生していることが必要なのであって、飛弾・三河以東の東国に存民が分布していないのは、この地方に右の二条件が欠如していたからである。なおもう一つ、「(ハ)地域的な古い社会秩序が破壊されていないという条件」が必要なのであり、吉備・築紫は「(イ)・(ロ)」の条件は満たしていたが、五世紀末から六世紀にかけて朝廷に反抗し、鎮圧後、「(ハ)」の条件が朝廷の圧迫によって破壊されたために、この地方に族民が存在しないのである。しかるに、族民が発生し存続するためには、右の三つの条件を満たしていなければならないのである。

さて、叙上のように六世紀を中心として抬頭してきた有力家父長家族層は、共同体の内部で独立的成員権を獲得していったのを基礎にして、それが進んで特権的・排他的成員権に発展していったのは、彼らが族民として豪族支配階級の末席に編組されていたからであった。従って、族民は露骨な収奪を受けることなく、豪族と私的な関係を保有したまま、村落の上層集団として存続してきたのであったが、大化改新以後、庚午年籍に族姓を付与され登録された時点で、始めて律令国家の組織的収奪を被るようになったのである。

しかもそのような時になって、同族である豪族が、郡司や中央の中・下級官人として、律令体制側に多く轉身していく過程で、次第に族民は豪族から疎外され、相互に対立するものになっていきつつあったのである。これを背後に強力な権力体系をもつ郡領や下級官人となっていた豪族の側からいうと、かつて自身の支配体制強化のため必要だった族民組織は、もはや不要のものとなってきつつあった。しかるに、かような歴史状況の変化の中で、美

濃国戸籍に多く下上・下中戸としてみえる族民集団は、国家の収奪の前に大化前代からの地位が、始めて動揺しつつあったのである。

しかしながら、八世紀前半においても、豪族との同族関係はまだ遺制・伝統として存続しており、天平宝字元年の大炊王立太子の勅によって、全国の族民が族字を除かれ、一斉にカバネ姓者に昇格したことを思えば、少なくとも奈良時代を通じて、郷里における彼らの地位は、権威あるものであったであろう。狭いながらも、在地における伝統的地位を最大限に利用して、墾田開発や口分田兼併あるいは私出挙によって私富を蓄積し、『続日本紀』にみられる族民のように献物叙位にあずかった殷富・富豪之輩に成長していく者もあったし、郷長や郡司の地位や中央下級官人の官職を得た者もあり、有位有官のカバネ姓者の中には、かつて族姓であった者が、少なからずいたのである。

今、顧みると、全体を通じて論断が大胆、粗雑にすぎ、また族民の擬制的同族としての三要素とか、族民発生の三条件などと、族民をあまりにも単純一様にとらえすぎたような気もする。それに、史料の限界をはるかに超えて推測に推測を重ねた部分も少なくなく、無知な考古学の知見を徒に振回した危険も犯しているであろうし、細部に至っては、初歩的な誤りや問題を多分に含んでいるものと思う。しかしながら、全体的な構想として受取ってもらえるならば、拙稿は石母田・門脇両氏の指摘に略々沿ったもののはずであり、私の奇想天外な思付きだけではないであろう。万一、そうであるならば、いまだ多くを明らかにしえない大化前代における地方豪族の人民支配の内容や、部民化されていない人民の存在とその実態の究明に、族民に関する知見が、細いながらも一筋の水路を開いてくれはしないであろうか、と念願する次第である。

なお、随所で諸先学の高説に対して、ことさらに異をたてたことは、ほとんど見戯に等しいことであつたろう。幾重にも非礼をお詫びして、妄論に御批正を賜われれば、望外の幸せである。不備

（付記）昭和四十六年一月に出版された石母田正氏著『日本の古代国家』の族民に関する簡潔な要約的見解は、その前年の十二月に学習院大学文学部に提出した卒業論文『日本古代における「族」の性質とその起源』と奇しくもほとんど結論的に一致していた。従って、大いに力を得て、冗漫に満ちた卒業論文を修正短縮し、幸いにも機会を得たので、ここに思い切って発表した次第である。

〔註〕

はじめに

1 直木孝次郎氏「日本古代における族について―族民の研究―」、『再び日本古代の「族」について―井上光貞氏の批判に答える―』（『日本古代国家の構造』所収）。

井上光貞氏『「族」の性質とその起源』（『日本古代国家の研究』所収）。

平野邦雄氏「無性と族姓の農民」（『大化前代社会組織の研究』所収）、「大化前代の社会構造」（『岩波講座・日本歴史・古代2』）。

門脇楨二氏『日本古代共同体の研究』（九一頁及び第二章「共同体と地域的統一」）。

野村忠夫氏『律令官人制の研究』（序編第三章第二節「身毛君氏の動向」）。

佐伯有清氏「附篇第四 日本古代の族についての研究」、「附篇第五 カバネについての研究動向」（『新撰姓氏録の研究・研究篇』）。

所謂族民論については、佐伯氏が詳細な研究史と問題点の整理をされているので、同氏著上掲書を参照されたい。

2 拙稿「日本古代の族民について」（『学習院史学』第七号）。

3 石母田氏『日本の古代国家』（三五九～三六〇頁）。

問題の設定

1 旧稿では婚姻を通して、族民の身分的地位を調査したのであったが、非常に不備な点がめだつたので、今一度検討してみた。

婚姻というものは、経済的面よりも身分や出自あるいは資格等に規制されるのが特徴的で、ことに女子の婚姻は、今日においてさえ少なからずそうしたものに縛りあげられている。以下では、特に女子の婚姻に注目しつつ、「大宝二年美濃国戸

日本古代における族民の性質とその起源（前之園）

第一表	婚姻相手の姓と性	性別件数	計	姓 別 婚姻率
カバネ姓者の婚姻相手 と件数	カバネ姓者同志		10	35.71
	族 姓	嫁 5 娶 3	8	28.57
	無カバネ姓	嫁 1 娶 1	2	7.14
	人 姓	嫁 0 娶 2	2	7.14
	部 姓	嫁 4 娶 2	6	21.43
	計	嫁 10 娶 8	28	100%

第二表	婚姻相手の姓と性	性別件数	計	姓 別 婚姻率
氏族者の婚姻相手と件数	カバネ姓	嫁 3 娶 5	8	7.92
	族 姓者同志		49	48.51
	無カバネ姓	嫁 1 娶 4	5	4.95
	人 姓	嫁 5 娶 8	13	12.87
	部 姓	嫁 6 娶 20	26	25.74
	計	嫁 15 娶 37	101	100%

第三表	婚姻相手の姓と性	性別件数	計	姓 別 婚姻率
無カバネ姓者の婚姻相手 と件数	カバネ姓	嫁 1 娶 1	2	10.05
	族 姓	嫁 4 娶 1	5	26.32
	無カバネ姓者同志		1	5.26
	人 姓	嫁 1 娶 0	1	5.26
	部 姓	嫁 2 娶 8	10	52.63
	計	嫁 8 娶 10	19	100%

籍」における身分と婚姻のかかわりを調べていくことにする。

第一表は、カバネ姓者（国造・県主・県造・栗栖田君・五百木部君）が、どのような人々といか程結婚しているかをカバネ姓戸内のカバネ姓者の婚姻として、右の五氏一戸の例を集計したものである。この表より、カバネ姓者の婚姻相手はカバネ姓者同志・族姓者・部姓者に大別できる。次に性別の婚姻をみると、カバネ姓女子が非カバネ姓の男子の妻となった（嫁）件数一〇件よりも、カバネ姓男子が非カバネ姓の女子を妻にした（娶）例がわずかに少ない（八件）。これをもって、カバネ姓女子の婚姻は非カバネ姓の男子に対して解放的であると言えるかもしれないが、むしろ、降嫁現象とみるべきであろう。

第二表は、族姓者（国造族・県主族・不破勝族・神直族）四氏・二八戸の婚姻である。婚姻相手としては族姓者同志の場合が半数に近く、非族姓者に対して閉鎖的であるが、部姓者との通婚が比較的に多い。それで、族姓者と部姓者は身分的に同格であるかという点、全然そうではない。

なぜなら、④族姓男子が非族姓の女子を娶った例三七件と、族姓女子が非族姓の男子へ嫁した一五件とを比べると、性別の婚姻件数（嫁と娶の件数）が非常にアンバランスであり、族姓女子の婚姻は非族姓の男子に対してきわめて閉鎖的であること。⑤特に部姓者との通婚の場合、族姓男子が部姓女子を妻にした例（娶）は二〇件にも達するのに対して、族姓女子が部姓男子に嫁したのは僅かに六件にすぎず、性別の婚姻件数がきわだって不均衡であるのは、族姓女子の婚姻が部姓男子に対してすこぶる冷淡であったことを物語っている。

要するに、族姓女子の婚姻は、非族姓者に対して極端に排他的であり、このことは族姓女子の身分的高さと無関係ではないのである。同様に、族姓男子が部姓女子を多く妻にすることができたのは、族姓男子が部姓女子から何んら身分的制約や排斥を受けなかった証拠である。即ち、族姓者は部姓者より相当に高い、幾分か特権的な身分を有していたといえよう。

第三表は、無カバネ姓者（春日・都布江・肩々・他田）四氏・五戸の婚姻である。婚姻相手は族姓者と部姓者に大別できる。先ず族姓者との場合をみるに、無カバネ姓男子と族姓女子（一件）・無カバネ姓女子と族姓男子四件という具合に、娶と嫁の件数が均衡でなく、無カバネ姓男子は族姓女子から排斥されている。これと逆な現象は、部姓者との通婚で、ここでは無カバネ姓女子が部姓男子に対して排他的なのである（嫁が二に対して娶が八で不均衡）。

つまり、無カバネ姓者は身分的に族姓者より下位であるが、部姓者より高いということができよう。なお、無カバネ姓者は経済的にもカバネ姓者・族姓者に次いで裕福であり、部姓者のそれをはるかに凌駕している（旧稿の「第6表 カバネ別九等戸」参照）。

第四表は、人姓者（秦人・漢人・神人）三氏・二六戸の婚姻の集計である。注意せられるのは、人姓者同志の通婚が抜群の割合を占めて閉鎖的なこともある。このことをもって、人姓者が非人姓者に対して特権的身分を形成していたとはいえない。むしろ、帰化系（神人は除く）という独自の性格を有していたが故の結果であろう。

なぜなら、族姓者・人姓者の婚姻形態が共に閉鎖的であるにもかかわらず、特に女子の婚姻についてみた場合、前述のごとく族姓女子の婚姻は極端に閉鎖的であったが、人姓女子の婚姻は非人姓の男子に対してむしろ開放的であり（娶の総計一三件より、嫁の総計が二件ほど多い）、特別に身分的なものにこだわってはいないからである。また、人姓男子はカバネ姓と族姓の女子に排斥されているが、逆に人姓女子は無カバネ姓と部姓の男子に対して閉鎖的であって、カバネ姓と族姓の男子に対しては開放的である。人姓者は無カバネ姓者と身分的略々に同格ではなかったであろうか。

第五表は、部姓者一七氏（個々の氏姓省略する）・五一戸の集計である。部姓者同志の通婚が過半数を占めるが、注目すべきは、性別婚姻件数がきわめて不均衡（嫁の総計三七に対し、娶のそれが一七）なことである。これは、部姓女子の婚姻

第四表 人姓者の婚姻相手と件数	婚姻相手の姓と性	性別件数	計	姓別婚姻率
	カバネ姓	嫁娶 2 男女 0	2	2.44
	族	嫁娶 8 男女 5	13	15.84
	無カバネ姓者	嫁娶 0 男女 1	1	1.22
	人姓者同志		54	65.85
	部	嫁娶 5 男女 7	12	14.63
	計	嫁娶 15 男女 13	82	100%

第五表 部姓者の婚姻相手と件数	婚姻相手の姓と性	性別件数	計	姓別婚姻率
	カバネ姓	嫁娶 2 男女 4	6	5.41
	族	嫁娶 20 男女 6	26	23.41
	無カバネ姓	嫁娶 8 男女 2	10	9.01
	人	嫁娶 7 男女 5	12	10.81
	部姓者同志		57	51.35
	計	嫁娶 37 男女 17	111	100%

第六表 姓別奴婢所有数					
姓	姓別奴婢所有数	奴婢人数	婢人数	姓別奴婢所有数	
カバネ姓	10	7	43	41	84
族	30	6	12	10	22
無カバネ姓	5	1	3	1	4
人	26	3	1	5	6
部	49	3	3	1	4
計	120戸	20戸	62人	58人	120人

が非部姓者に対してすぐれて開放的であったとともに、部姓女子が配偶者を選ぶに際して、身分的に有利な立場になかったことを示すものである。同様に、部姓男子が非部姓の女子を娶っている件数が少ないのは、彼等が非部姓の女子から排斥されたことを物語っている。そして、この部姓女子の婚姻の開放性（非部姓の男子を排斥しえなかった）と族姓女子の閉鎖的婚姻（非族姓の男子を冷淡に排斥しえた）・部姓男子の非外向的婚姻（非部姓の女子から排斥された）と族姓男子の外向的婚姻（非族姓の女子に排斥されなかった）は、実に対照的なありかたをしているのではないか。族姓者と部姓者との間には、格段の身分のひらきがあったことを認めざるをえない。

以上、婚姻の調査を通して、狭い村落の中にも驚くほどの身分秩序が存在したことを推測したのであるが、それは大体、カバネ姓者（ただし、経済的には零落者もかなり多い。）——族姓者——無カバネ姓者・人姓者——部姓者という序列を構成しており、大別すると、前の二者が特権的身分を形成し、後の三者が被支配身分に属するものと考えられる。それが呼称・表記の上では、カバネを有するものとしてでない者の差違として現われているのである。しかしながら、右の序列が厳

第七表 歴名帳における同姓集合率				
出雲・神門両郡	姓	戸口数	戸主と同姓の戸口数	同姓集合率
	カバネ姓	147	74	50.34
	族姓	21	7	33.3
	無カバネ姓部	7	1	12.5
	姓	355	85	23.94

密に全国共通であつたというのではない。まして、全国的な全階層の見地から観れば、被支配階級内のわずかな身分の格差に過ぎないであらうけれども、小村落の中では相当の格差を生ずるものであらう。かような意味において、村落内部で族民はカバネ姓者に次ぐ上位身分者であり、下位身分集団（無カバネ姓者・人姓者・部姓者）に対して排他的・特権的身分を形成していたものと思われる。

2 村落における族民の地位の高さを窺える史料として、奴婢とその所有者を記載した大宝二年の「美濃国戸籍」がある。それによって集計したのが第六表であるが、奴婢の大部分が集中的にカバネ姓戸と族姓戸に所有されていることがわかる。八世紀初頭ともなると、公地公民制が浸透し、奴婢が新たに多量に発生する余地は少なくなり、国家としても公民が奴婢に転落することを収入源の減少という利害から防止したはずである。にもかかわらず、カバネ姓戸と族姓戸に奴婢が独占的に所有されているのは、大化後に彼等の蓄積に専念したというより、それ以前から彼らは顕著な奴婢所有者であつたことを明示しているよう。即ち、註1に前述した族民の身分的高さに照応して、奴婢の所有においても族民はカバネ姓者について有力なのであり、族民が六世紀の群集墳を営んだ有力家父長家族の系譜を引いていることを裏書するものであらう。

他に族民の奴婢所有を示すものとして、「天平十二年越前国江沼郡山背郷計帳」の郷長江沼臣族忍人の戸に奴一人、「東大寺奴婢帳」には山背国紀伊郡邑薩里戸主茨田連族小墨の戸に奴二人、同国同郡大里郷戸主茨田連族智麻呂の戸に奴婢四人がみえる。

次に出雲における族民の地位を観察してみよう。「天平十一年出雲国大税賑給歴名帳」は籍帳に比較すればきわめて部分的な史料であるが、賑給を受けた戸口の氏姓とその戸主の氏姓を記載しているので、戸主と戸口の氏姓の異同を調査することによって、通婚や寄口等のありかたの一面を推測することが可能であらう。それで、同姓集合率（ウジ・カバネを同じくする戸主と戸口の集合率）を集計すると、上表のように族民の同姓集合率はカバネ姓について高率を呈する。これを逆に言えば、族民は部姓者よりも異姓戸主（ウジ・カバネを異にする戸主）の戸口となるものが少なく、寄口的存在として吸収されるようなことが比較的に少なかったことを物語るものであらう。特に出雲郡のみを集計した場合、姓別の同姓集合率が、カバネ姓五七・一四、族姓三三・三三、部姓一三・六〇という具合に、族姓と部姓との間にはかなりのひらきがみられるのである。思うに、出雲国西部においても族民の地位はカバネ姓集団に次ぐものであつたであらう。

第一章

1. 直木氏前掲書八八頁。

第二章

1. 直木氏前掲得六四頁。

2. カバネ「首」については、太田亮氏が、(一)村の長、(二)屯倉の首、(三)小さな伴造、の称したカバネであるといわれており、『日本上代社会組織の研究』第四編第十一章、それを受けて吉田晶氏も、首は臣、連より下位のものの称するカバネで、内容的に(一)部民制の初期の伴造、(二)帰化人の官僚的な職掌上の地位、(三)ミヤケの管掌者、としての地位にあるもののカバネとされている（『カバネ「首」について——特に天平十一年出雲国大税賑給歴名帳を中心として——』、『国史論集 一』）。おそらく首は村首の階級に特有なカバネであらう。

3. 井上光貞氏「国造制の成立」二六頁、『史学雑誌』六十の十一。

4. 天武八姓以前にあたかも官位のごとき、カバネの尊卑・等級の序列があったとは思わないが、例えば君・臣姓と連・直姓を称する氏族には、豪族としての出自やその性格に幾分か違いがみられるようであり、そうした意味において「高い」、「有力な」カバネという表現を使っているまでである。

5. 1. 阿刀氏は、宿禰（山城国神別）・連（摂津・和泉国神別）・造（積組造Ⅱ河内国神別阿刀宿禰同祖）ともに石上朝臣同祖とあるので、かつては連—造—部という構造をとりつつ河内、摂津一帯に居住していたのであらう。

2. 茨田連は皇別として多朝臣同祖とされ、茨田勝は河内国諸蕃とみえるので系統を異にするかにみえるが、ともに帰化人であることは間違いない、しかも居所を同じくする—連は河内の茨田屯倉の管掌者、勝も『姓氏録』に「大雀天皇諱仁徳。御世。賜居地於茨田邑」。因為「茨田勝」.—とある—ので、同族と考えてよいであらう。

3. 掃守氏は河内国神別として、宿禰（振玉命之後也）、連（同神四世之孫天忍人命之後也）、造（連に同じ）とみえ、首は和泉国神別に「振玉命四世孫天忍人命之後也。雄略天皇御世。監掃除事。賜姓掃守連。」（「連」は首の誤りか）とあって、いずれも同族として河内・和泉あたりに共住していたものらしい。

4. 出雲氏は、A「神龜三年山背国愛宕郡出雲郷計帳」から、出雲臣・臣族—部という氏族構造が知られ、この出雲氏集団はいつの頃か出雲から移住してきたものであることは、愛宕郡に式内愛宕神社が、同郡出雲郷には式内出雲高野神社があり、出雲国には意宇郡に式内意陀支社二座と高野山があって（『風土記』）、神社名や地名に共通するものが少なくなく、A

の出雲氏集団は現在の島根県安来市あたりから移住してきたものであるらしい（これについては、拙稿「出雲の服属神話の史的考察」『史游』第二号）に詳論した。なお、B「歴名帳」の出雲郡出雲郷には出雲臣・積首・積部が共存しており、出雲積首、出雲積は奇妙な氏姓であるが、この「ツミ」は垂仁記の本牟智和氣王の語に「出雲国造之祖、名岐比佐都美」とみえ、『風土記』には出雲郡出雲郷に支比佐社、同郡漆沼郷の曾伎乃夜社の祭神が天津杵比佐可美、高日子命とあって、この一帯には出雲臣も多く居住しているので、出雲積首＝積は国造出雲臣の同族と考えてよいであろう。従って、A・Bから出雲氏は大体4のような氏族構造をとっていたものと推察する。

5の江沼首は『姓名録抄』と『正倉院文書』（江沼首塩万邑）以外にみえないものであるが、江沼を氏の名とするのは越前国江沼郡の江沼氏以外に考えられないので、江沼臣の同族と考えた次第である。

7の物部首は春日氏の同族の物部首（のち布留宿禰）ではなく、河内国神別「同神（神饒速日命）子味鳥乳命之後也」の方である。

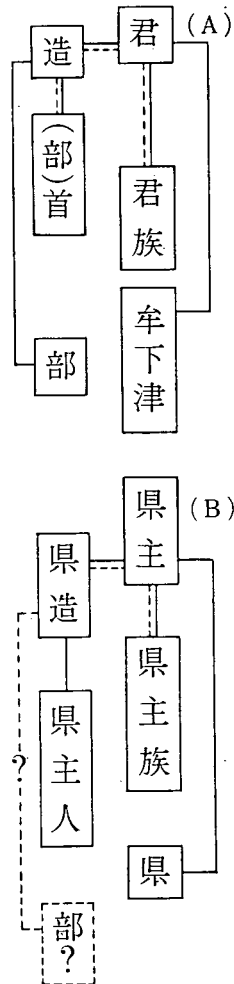
6・8は美濃の身毛氏県主の構造であるが、問題なのは、8の県造が県主の中から上昇してきた県主集団の族長と考えられている（門脇禎二氏前掲書六七頁、上田正昭氏『日本古代国家成立史の研究』一五三、一七九頁、長瀬仁氏「ムゲツ君氏について」『新潟史学』四号、六二頁）ことで、もしそうならば、県主族の族字が族長の氏姓の下に付せられているとする私の考えはあてはまらないことになる。しかし、県主の族民が県造族と呼称されなかったのは、県造が美濃の加茂県主集団の族長ではなかったからであろう。それは、県造の性格と武義造・牟義都首の性格とを対比するときそう言えるのである。

先ず、身毛氏と加茂県主氏は地域的に近接しているのみでなく、両者に密接な婚姻関係と『姓氏録』左京皇別の条に同祖関係が知られ、相当緊密な関係にあったらしいのである（井上氏「国造制の成立」）。次に、武義造について野村氏は「牟下津造（武義造）＝牟下津部（牟義部）は身毛君氏の部曲ではない。この伴造＝部の形態は、大和朝廷の品部として身毛氏支配下の農民が割きとられ、身毛君氏のもとにあった小豪族が造姓を与えられて管理にあたったものと推測する。」（野村氏前掲書八七頁）と述べられている。また牟義都首は延喜主水司式に見え、負名氏であるらしく、身毛氏は「大和勢力への服属の證」として、支配領域内の美濃の水を献ずる儀礼関係のなかに組みこまれ（同上八八頁）ていたらしいのである。

さらに、美濃の県主が鴨県主の一種であるならば、佐伯氏（「ヤタガラス伝説と鴨氏」前掲書所収）や井上氏（「カモ県主の研究」前掲書所収）が鴨県主を主殿寮・主水司の負名氏であったと論じられているように、美濃の県主も何かそうしたものと関係あるのではあるまいか。

思うに、美濃の県主は身毛氏や鴨県主との関係から推して、主水司に結びついた性格をもち、そうした伴造的職務を特に

分掌した一派が県造だったのではあるまいか。しかるに、県造は武義造や牟義都首と同様に県主の中で伴造的職掌を負う同族が称した氏姓であると考ええる。それを図式化すると(B)のようになり、系譜・職掌・地理的に近親関係にある(A)身毛氏とは



は同様な氏族構造をとっていたのではなからうか。そうであるならば、県造をもって美濃の加茂県主氏の族長とするわけにはいかないであろう。

- 6 前川明久氏「大化前代の宿禰（足尾）について」『歴史評論』一六四号。
- 7 「武蔵国造の反乱」『古代の日本・7 関東』一四二頁。
- 8 『日本の考古学・Ⅳ』（Ⅲ古墳文化の地域的特色・4山陰・三、地域的特色―出雲を中心として―）。
- 9 山本清氏「遺跡の示す古代出雲の様相」『出雲国風土記の研究』所収）四三一～四三二頁。
- 10 野村氏前掲書。
- 11 高藤昇氏「出雲国風土記に見える神門臣」『日本上古史研究』第六卷第五号。
- 12 岸俊男氏「防人考」『日本古代政治史研究』二九八頁。
- 13 岸氏前掲書二九四頁。
- 14 石母田氏前掲書三八一頁。
- 15 直木氏前掲書七九頁。
- 16 上田正昭氏「県主と祭祀団」『日本古代国家成立史の研究』一七七頁。

- 17 津田左右吉氏『日本上代史の研究』一三二頁。
- 18 直木氏「伊勢神宮」（『日本古代の氏族と天皇』二六四頁、註（6）。
- 19 原田敏明氏「古代宗教論」（『岩波講座・日本歴史・古代2』二八八頁。

第三章

- 1 石母田氏前掲書三六〇頁。
- 2 和島誠一氏『岩波講座・日本歴史・古代2』。
- 3 和島氏前掲書一四五頁。
- 4 和島氏前掲書一四六頁。
- 5 和島氏前掲書一五〇頁。
- 6 古代学研究会「後期古墳の研究」（『古代学研究』三〇号）五一～五二頁、また弥長貞三氏「御野国加毛郡半布里戸籍の故地について」（『東海地方史の展開』地方史研究協議会編）参照。
- 7 和島氏前掲書一五一～一五三頁。
- 8 美濃の県造については、第二章の註5に述べたが、県造とは県主の中で特に伴造的職務を有するもので、県主の中から分出したものか、あるいは県主配下の小豪族かのいずれかであろう。ただし、これは美濃の県造の場合で、伊勢の県造などはまた別に考えなければならない。
- 9 和島氏前掲書一八三頁。
- 10 門脇氏前掲書九二頁、註（一七）。
- 11 原島礼二氏『日本古代社会の基礎構造』三四二頁。
- 12 門脇氏前掲書九二頁。
- 13 門脇氏前掲書八八頁。
- 14 門脇氏前掲書五九頁。
- 15 門脇氏前掲書八四頁。
- 16 和島氏前掲書一八〇頁。
- 17 門脇・甘粕氏前掲書八四～八五頁。

- 18 門脇・甘粕氏前掲書八七頁。
- 19 門脇氏前掲書八四頁。
- 20 直木氏前掲書七一頁。
- 21 直木氏前掲書七九頁。
- 22 『日本の考古学・V』四四五頁。
- 23 『日本の考古学・V』三九六頁。
- 24 和島氏前掲書一八〇頁。
- 25 宮本教氏「律令制村落社会の構造に関する諸問題——階層構成を中心として——」（『日本古代史論集・下巻』）四二三頁。
- 26 井上氏「国造制の成立」三四頁。
- 27 『古代の日本・7・関東』一〇三頁において、尾崎喜左氏は上毛野君とその一族石上部君・車持君・朝倉君との関係を、「封建的な体制にあったものではなからうか。」と言われているが、おそらくそのように見てよいであろう。
- 28 平野氏は同氏前掲書三七八頁において、神亀三年の「山背国愛宕郡出雲郷出雲下里計帳」にみえる上毛野君族を帰化人田辺氏変ずるところの族民であろうとされているが、『姓氏録』左京皇別の上毛野朝臣条に見るとおり、田辺史が上毛野公に改姓されたのは天平勝宝二年（七五〇）が最初であるように、神亀三年（七二六）の上毛野君族と時間的にズレているし、帰化人変ずるところの上毛野氏は多く公字を称して君字は少ない。また族民が遠く本貫を離れて居住している例は豊後の茨田連族などその外に例もあるので、上毛野君族を必ずしも帰化人とすることはできない。
- 29 直木氏前掲書七五〜七六頁。
- 30 直木氏前掲書七六頁。
- 31 直木氏前掲書七五頁。
- 32 『日本の考古学・N』二〇七頁。
- 33 『日本の考古学・N』二〇六頁。
- 34 和島氏前掲書一六八頁。
- 35 『日本の考古学・V』四三九頁。
- 36 門脇・甘粕氏前掲書九一頁。
- 37 黛弘道氏「犬養氏および犬養部に関する研究」（『学習院史学』第二号）。

38 井上氏「国造制の成立」二六頁。

志田諱一氏『古代氏族の性格と伝承』一六一頁。

第四章

1 拙稿前掲九七頁。

2 井上氏前掲書一六九頁。

3 『統紀』天平二十年七月戊寅条に「正八位下山代直大山等三人並賜_レ忌寸姓」とあるが、『姓氏錄』によると、山代忌寸は「出自_二魯國白龍王_一也」（左京諸蕃上）と見え帰化人である。なお、山城国未定雑姓の山代直も「火明命之後也」とみえるので、天津日子根命を祖とする山背国造とは別系の氏である。

4 国史大系本では「其戸籍記。无_二姓及族字_一。於_レ理不_レ穩。宜_レ為_二改正_一。」とあるが、井上氏の指摘（同氏前掲書一七三頁）に従って、よみかえた。

5 平野氏前掲書三四六―三五四頁。

6 井上氏前掲書一七五頁。

〔補註〕 佐伯有清氏が提案された族姓との復姓との関係という問題については、準備不足のため、ほとんど述べることができなかった。この問題は、別稿を用意しなければ論じ尽せない程に重大なテーマであると思われるので、今後とも勉強してみたい。